専修大学社会科学研究所月報
ISSN0286-312X
No. 520
2006. 10. 20

粉青沙器研究の歩みと現在

丁　哲 秀、宋　基 珍、樋 口　淳

目　　次

１．粉青沙器研究の歩み …… 2
1-1　光復まで …… 2
1-2　光復後 …… 5
２．高興・寶城・長興の窯址地表調査 …… 7
2-1　高興郡 …… 17
2-1-1　青磁窯址 …… 18
2-1-2　粉青沙器窯址 …… 19
2-2　寶城郡 …… 20
2-2-1　粉青沙器窯址 …… 20
2-2-2　白磁窯址 …… 21
2-3　長興郡 …… 22
2-3-1　青磁窯址 …… 22
2-3-2　粉青沙器 …… 22
2-3-3　白磁窯址 …… 23
３．姜敬淑の新しい編年と問題提起 …… 24
４．まとめ …… 28
編集後記 …… 37

丁哲秀、宋基珍、樋口淳の３名は、2004 年３月から「粉引」の共同研究に着手した。

粉引は、日本の茶道文化の世界では「三島」、韓国の陶磁研究者の間では「粉青沙器」と呼ばれる朝鮮王朝陶磁の一種で、茶会記をはじめとした茶道の文献にも記録が古い。しかし陶磁研究の上では、不思議と避けて通られることが多く、1990 年代に全羅南道高興郡雲堡里の窯址が集中的に踏査されるまでは、その窯址に関心を示されることもほとんどなかった。

従来の韓国陶磁研究には、高麗王朝の青磁、朝鮮王朝の白磁を中心に据えた論考が多く、粉青沙器を「頽落した高麗青磁の面影を残しながら、朝鮮王朝白磁に移行する過渡期の陶磁」と考え、周縁的な存在として扱う傾向が見られた。粉青沙器に言及する場合も、官衙に収められた名品に焦点があてられ、重ねて焼かれた粉引に目を向ける機会は少なかった。

日本の陶磁研究の歩みを振り返っても、戦前にこそ鶏龍山の発掘記録をはじめ、重要な論考が幾つかあるが、戦後には見るべきものは少ない。ただ陶磁の愛好家や茶の世界で、鶏龍山、刷毛目と並んで「務安粉引」「寶城粉引」が語られ続けてきたにすぎない。

このような状況のもとで、務安在住の陶芸家丁哲秀と寶城在住の陶芸家宋基珍は、それぞれの地元の研究者、陶芸家とともに務安と寶城の窯址における地表調査を重ねてきた。陶磁というモノを通じて韓国と日本の文化の差異を考察しようと考えた樋口淳は、丁哲秀、宋基珍と協力して窯址の調査を行い、三名の協力の下に「高麗・朝鮮王朝陶磁と日本（仮題）」という論考を公表しようと考えた。

本稿は、その基礎資料となる「粉青沙器研究の歩みと現状」を整理した研究ノートである。1990 年代以降の粉青沙器をはじめとする、地方窯研究の深化には、瞠目すべきものがあるが、韓国においても日本においても、残念ながらこれを整理した論考が少ない。丁哲秀、宋基珍、樋口淳は、本稿と平行して、現在「高麗・朝鮮王朝陶磁と日本（仮題）」を執筆中であり、2007 年春までに公表の予定である。これら二つの仕事を通して、韓日の文化と技術の交流と物の見方の異同を明らかにできれば幸いである。

１．粉青沙器研究の歩み

1-1　光復まで

朝鮮王朝の陶磁に関する日本人の研究は、1910 年代にはじまる。1945 年 8 月 15 日の光復にいたるまで、八木装三郎、中尾万三、奥田誠一、野守健、柳宗悦、浅川伯教、浅川巧、奥平武彦、小山富士夫、田中明、山田万吉郎などによって多彩な成果が残されたが、ここでは、今日にいたるまで重要な意味を持つ３つの業績を簡単に紹介するにとどめたい。

ひとつは、浅川伯教の業績である。浅川伯教は、柳宗悦に朝鮮王朝陶磁の美をはじめて伝え

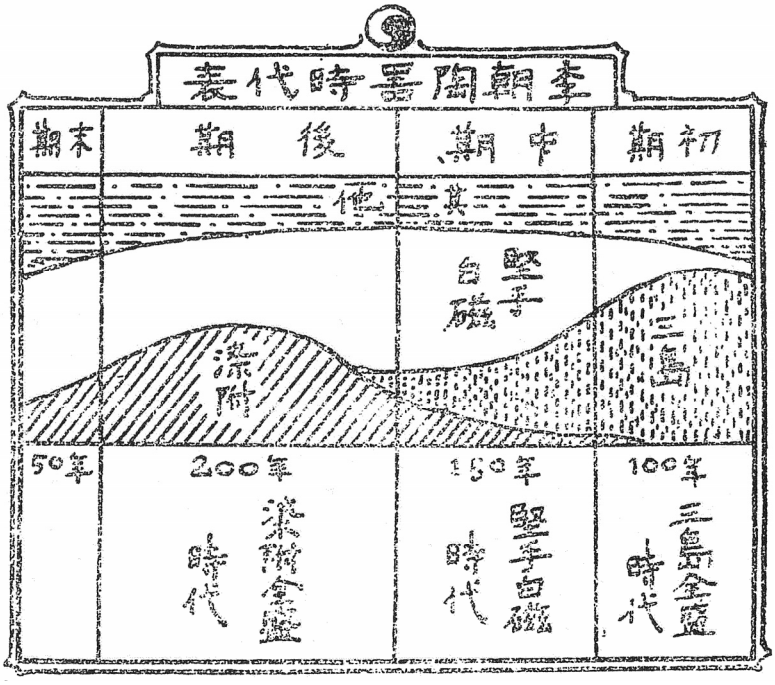

表 1

た人としても知られるが、1922 年に柳宗悦の主導した雑誌「白樺」の特集号「李朝陶磁器の紹介」に「李朝陶器の価値及び変遷に就て」を寄稿し、表 1 のような時代区分を提示した。(1)この区分は、今日から見れば随分粗雑なものであるが、系統的な窯址調査も、文献の調査もなかった当時の考証としては抜群である。とくに三島（＝粉青沙器）に関して、李朝（＝朝鮮王朝）の陶磁と位置づけ、全盛期を初期 100 年としたことの意味は大きい。彼は、三島についてこう書いている。

「三島の全盛期が李朝であるという事は、外国人でこの事に気の付いた人があると云うことを随分前に聞いたが、段々窯跡の具合や発掘を常にやって居る人に聞くと、高麗の青磁と共に出る事は決して無く、主に李朝の墓から出ると云う事が云はれて居る。又李朝の白磁と共に出たり、時々古染付と共に出た事も江華島辺ではあったらしい。」

「三島は今迄高麗のものとしておったらしいが、これは誤りらしく思ふ。三島の種類は之を四種に分ける事が出来ると思ふ。型で文様を作った暦手や花三島のような物と、白絵を敷いて上から彫刻をやった彫三島と、白絵を敷いた上に鉄釉で文様を描いた絵三島と、白絵を刷毛でぎゅっと敷いた刷毛目三島とである。」(2)

この記述は、当時の研究状況を知る上でも興味深い。彼は、朝鮮半島各地の窯址をくまなく歩き、光復後も韓国に残り、陶片や収集品を整理し、その大部分は、韓国国立中央博物館に収

蔵されたと聞くが、いまだに未公開である。彼の作成した「李朝陶磁窯跡一覧表」は、その後に新しい窯址が発見されて調査が行われたので、修正しなければならない部分が多いが、その業績は現在に至るまで高く評価される価値がある。

二つ目は、浅川巧の業績である。

浅川伯教の弟である巧も、兄と同じく朝鮮各地の窯址を踏査し、多くの記録を残したが、1931年に惜しまれながら世を去った。林業試験所に勤務しながら、陶磁をはじめ朝鮮王朝の工芸研究に明け暮れた彼の残したもっとも大きな業績は『朝鮮陶磁名考』であろう。

朝鮮王朝の陶磁器の美しさだけではなく、陶磁器を育んだ生活文化に敬意を感じていた巧は、陶磁器を祭礼器、食器、文房具、化粧用具、室内用具、道具、容器、雑具、建築用材料に分けてスケッチし、名称を記録し、その使用法や種類を細かく記述した。記述は、陶磁器にとどまらず「陶磁器に関係ある名称」の項を別に設け、「窯場及製陶用具」、「陶磁原料」、「陶磁の種類」、「陶磁器部分の名称」、「陶磁器数称」、「陶磁器に記されたる記号」、「陶磁器の造られた地名」、「日本製陶磁器の名称と朝鮮語」など陶磁研究に欠くことのできない用語を分類整理し、その後の研究の基礎を築いた。

今日の陶磁や窯址の研究の記述には、さらに細かい呼称を補う必要があることは言うまでも無いが、『名考』がその後の研究に与えた影響は計り知れないと思う。

「本篇は十余年来心掛けて学び得た李朝陶磁器の名称を集録したものであるが、飛び入りの日本人の身ではなかなか正確を期することは難しい。それでその点を気遣ひ公にすることを躊躇していたのであるが、この儘に放置せば更に不明に終わる心配もあり、一応取纏めて置くことは識者の教えを仰ぐ上にも便利であると考へ上梓することにした。この企ては親しき交わりの間に私を教えてくれた朝鮮の友、多数の方々の愛の記念ともし度く思ふ。」(3)

これが、この本の「緒言」を結ぶ言葉である。浅川巧は、この本の公刊を待つことなく、忽然と友人達のまえから姿を消した。

3 つ目は、終生在野の人であろうとした浅川兄弟とは対極的に、朝鮮総督府の文化政策の積極的推進者であった野守健の仕事である。

朝鮮総督府は、朝鮮各地の遺跡を発掘調査し、1915 年からおよそ 20 余年にかけて 『朝鮮古蹟図譜』を刊行した。この調査は、黒板勝美等によって主導されたもので「その土地のものはその土地へ」という現地主義に基づき、朝鮮の文化財を朝鮮国内に保存、展示することを原則としたが、当時フランス、イギリス、オランダなどがそれぞれの植民地で展開した文化政策と同じ役割を担っていた。(4)

野守は、1927 年 9 月 29 日から 10 月 5 日まで、神田惣蔵とともに古跡調査事業の一環として鶏龍山麓陶窯址の発掘調査を行った。その直接のきっかけは、前年の 12 月以来、鶏龍山麓

陶窯址から多くの陶片が盗掘され、骨董商の手を通して日本国内にも持ち込まれるという事態が発生したためである。

この時の調査の報告書が『鶏龍山麓陶窯址調査報告』である。野守はこの報告書で特に粉青沙器発生時期の究明に大きな比重を置き、『世宗実録地理志』の記録、出土陶片の形態、文様、釉薬、技巧などからみて朝鮮初期の窯址であると述べている。

この報告書は、光復までに公表された陶窯址発掘の学術報告としては、ほとんど唯一のものであり、現在の研究水準からみれば不足の点や見落としはあるが、陶磁研究史上の価値は、高く評価されてよい。特に、鶏龍山一帯の窯址が、観光開発などによって無残に破壊されつつある今日、残された記録の意味は大きい。

1-2　光復後

光復後の陶磁研究の主流は、当然のことながら韓国人研究者の手に移った。

1950 年代の混乱と動乱が去ると、1960 年代初めには陶窯址発掘調査が本格的に始められた。1963 年の全羅南道光州市北区忠孝洞における粉青沙器窯址発掘を始めとして、1964 年と 1965 年の 2 度にわたる京議道広州部退村面道馬里の朝鮮前期白磁窯址発掘、1964 年に着手された全羅南道康津郡大口面一帯の高麗青磁窯址に対する数年間にわたる発掘調査、さらには 1965 年から 66 年にかけての仁川市景西洞の初期青磁窯址の発掘等が行われた。

70 年代に入ると『韓国美術全集』全 15 巻（1973～1976）が発刊され、その第 10 巻の『李朝陶磁』を鄭良謨が責任編集と執筆した。70 年代後半（1977～1983）には、全 24 巻の『韓国の美』が刊行され、このうち『韓国の美 3』が「粉青沙器篇」とされた。

1976 年からは、日本の小学館『世界陶磁全集』全 22 巻が刊行され、その第 19 巻の李朝篇には、多くの韓国研究者の研究成果が発表された。

その他、60 年代以降の主要な論文として、姜敬淑の「李朝粉青沙器の研究」、鄭良謨の「粉青沙器印花文大接試考」、金英媛の「朝鮮朝印花の編年的考察」、尹龍二の「粉青沙器の消滅と白磁の発達に関して」などがある。

特に尹龍二は、1469 年の京畿道広州の官窯成立が、従来の陶磁器の種類と質に大きな変化をもたらしたという重要な仮説を提起した。すなわち、15 世紀前半までは国家は必要とする陶磁器を土産貢物として充当していたが、15 世紀後半からは国家の官営沙器製造場としての分院がそれを担当するようになり、陶磁の生産が粉青沙器中心から白磁中心に変わり、粉青沙器がおおよそ 16 世紀後半には消滅して行ったというのである。

尹龍二の見解は、それまで支配的であった粉青沙器の「壬辰倭乱消滅説」に対して、革新的な見解となった。[5]

時期区分 / 特徴 窯址 編年資料		前期（発生期）約 1360～1420		中期（発展期）約 1420～1480		後期（衰退期）約 1480～1600	
		第 1 期 約 1360～1390	第 2 期 約 1390～1420	第 1 期 約 1420～1450	第 2 期 約 1450～1480	第 1 期 約 1480～1550	第 2 期 約 1550～1600
特徴	文様	高麗象嵌青磁の退落時代、蓮唐草文、蓮柳文	蓮唐草文、草文、重圏文、印花文発生、黒色象嵌二重几帳文	蓮唐草文（変形）、草文、重圏文等の象嵌技法、印花文の発展、集団連圏文、六角弁文、各種花文、剥地技法、印刻技法、 ※白磁生産	集団連圏文の構図上の安定、刷毛目技法 ※青画白磁生産	印花技法の弛緩、鉄画技法、刷毛目技法、粉粧技法、地方様式顕著 ※粉粧白磁、白磁	粉粧技法 ※白磁顕著に増加
	器型	内彎型、S 字型(瓶)	粗雑で重い、内彎型が主流、竹の節高台	内彎型、量感ある外反型、竹の節高台	量感ある外反型、	量感ある外反型、高台が高い	量感ある外反型
	釉態		暗緑色、青磁釉系統の透明釉	明るい灰青色の精選された胎土、透明釉	灰青色透明釉	灰黒色胎土に雑物が混入し、釉層が薄くなり半透明	灰青色胎土、白磁胎土、白色釉
	技法		重ね燔造、胎土目	重ね燔造、胎土目	重ね燔造、胎土目、砂止め高台	荒い砂の支え登場、砂混じりの土支え（6 から 10）	胎土目を高台の外郭につける
窯址		全南康津郡大口面沙堂里尾山・堂田	牛耳、道峯、双東、忠孝 2 号（平村部落）、亀岩、長川（巽項部落）、於山	陶水 1･2 号、樊川 1･2 号、三成、観音、佳山、鶴東、中興 1･2 号、青羅、温泉、双流、起龍、鶴峯、牛東、孝子 1･2･3 号（中全村）、亀巌、架山、花済 1 号、松田 2･3 号	達田、鶴峯、沙器幕 1･2･4 号、忠孝 1 号、雲垈 3･4 号、松田 1 号(蒲谷部落)、来台、南莎、箕山	青鶴 1 号、金沙鶴峯、沙器幕 3 号、雲垈 5 号、水東、龍渓 1･2 号、孝子 4 号（中全村）、龍田、花済 2 号、周南、沙鳧	青鶴 2 号、文原
編年資料		青磁象嵌正陵銘唐草文大接 青磁象嵌徳泉銘蓮柳文瓶 粉青象嵌義成庫銘瓶 崔雲海墓出土粉青象嵌波涛文碗 粉青印花敬承府銘菊花文皿（2 点） 粉青象嵌恭安銘蓮唐草文大接 粉青印花恭安府銘菊花文大接（2 点） 粉青印花恭安府銘菊花文皿 粉青印花仁寧府銘菊花文大接		貞昭公主墓出土粉青象嵌草花文四耳壺 貞昭公主墓出土粉青印花集団連圏文四耳壺 粉青剥地蓮魚文高峯和尚骨壺 粉青象嵌宣徳 10 年銘墓誌 粉青印花昆南郡長興庫銘集団連圏文皿 粉青印花長興庫銘菊花文大接 粉青象嵌正統 5年銘蓮魚文盤型墓誌 粉青象嵌正統 14 年銘円筒型墓誌 粉青象嵌景泰元年銘墓誌 粉青象嵌曹沆之墓銘墓誌 温寧君墓出土粉青刷毛目文壺・皿 粉青印花徳寧府銘集団連圏文皿 粉青印花菊花文月山君胎壺 粉青象嵌天順 8 年銘墓誌 粉青象嵌成化 3 年銘墓誌 ※忠孝粉青 1 号窯出土品		粉青刷毛目鉄絵成化 23 年銘墓誌 粉青刷毛目鉄絵弘治 3 年銘墓誌 粉青刷毛目弘治 14 年銘墓誌 粉青刷毛目嘉靖 15 年銘墓誌 粉青粉粧嘉靖 19 年銘墓誌 粉青粉粧万暦 15 年銘墓誌	

こうした光復後の粉青沙器研究に決定的な方向づけを行ったのが、姜敬淑の『粉青沙器研究』（1986 年）である。姜敬淑は、それまでの調査によって確認された 110 箇所・全 225 基の粉青沙器窯址のうち、61 基の窯址を対象とし、直接に調査し収集した陶片を基本資料として粉青沙器の全国的な広がりと、高い技術、多様な造形力を明らかにし、精度の高い編年を行った。広州司餐院の官窯白磁の研究にシフトしていた韓国陶磁研究のなかで、姜敬淑のこの業績は抜群のものであったといえよう。

姜敬淑は、この著作のなかで粉青沙器の前期（発生期）、中期（発展期）、後期（衰退期）の過程を体系化し、簡潔に左表のような時期区分を試みた。(6)

２．高興・寶城・長興の窯址地表調査

1980 年代後半から、韓国全土の窯址調査は、本格化する。なかでも国立光州博物館は、1986 年から全羅南道の陶窯址に対する地表調査を実施し、1986 年に霊巌、海南、務安郡、1987 年に羅州、咸平、霊光郡、1988 年に長城、潭陽郡を調査した。

これらの調査の中で、われわれが特に注目するのは、高興郡、寶城郡、長興郡の調査である。

まず高興郡豆原面雲堡里の調査は、1989 年の 3 月から 4 月に行われた。それまで高興郡には、梨花女子大学博物館の調査や、姜敬淑、鄭良護、香本不苦治等の業績によって 21 基の粉青沙器窯の存在が知られていたが、この調査によって新たに青磁窯址 4 基と粉青沙器窯址 4 基が発見された。

長興郡・寶城郡・高興郡関連地図

国立光州博物館は、さらに 1990 年から 1992 年まで雲垈里以外の高興と寶城、長興の調査を行い、青磁 4 基、粉青沙器 9 基、白磁 35 基など 48 基におよぶ陶窯址調査報告を刊行した。

この二つの調査は、記述の方法が異なるが、２つの調査の概要を各郡ごとに表にまとめると以下の通りである。(7)

高興窯址調査

窯址	場所	陶片の特徴
青磁 1 号窯址	雲垈里石村	青磁と**黒釉陶**が一緒に発見され、器の種類は大接、皿、碗、鉢、鐘子、瓶、甕、壺など多様。
青磁 2 号窯址	雲垈里	青磁と**黒釉陶**、さらに少数の土器が発見される。 青磁には、大接、皿、碗、瓶、黒釉には瓶と甕、土器には甕と鉢などがある。
青磁 3 号窯址	雲垈里	緑青色、緑褐色を帯びる粗悪な青磁窯址で、**黒釉陶**が一緒に発見される。器の種類は、大接、皿、鐘子、鉢、瓶、甕など。窯道具として匣鉢、トチンなどがある。
青磁 4 号窯址	雲垈里	青磁と**黒釉陶**、そして相当数の素焼き片が発見される。 青磁は、大接、皿、碗、鐘子など、黒釉は、瓶、小瓶、甕、扁壺など。
青磁 5 号窯址	雲垈里	緑褐色、暗緑色を帯びる粗悪な青磁とともに**黒釉瓶**が少数発見される。青磁の種類は大接、皿、鉢、盒、甕など。
粉青 1 号窯址	雲垈里	印花が使用される。極めて少数の大接と皿などに瓦線文が施されたものもある。 **第 1 群**；印花で、大接、皿、鉢、鐘子など。**第 2 群**；印花に代わり、陰刻の瓦線文がほどこされ、その上に刷毛目で白土粉粧されている。大接、皿、鐘子など。**その他**；象嵌の粉青瓶と文様がない瓶と甕など。
粉青 2 号窯址	雲垈里	印花技法が主に使用される。陰刻の線文の上を刷毛で白土粉粧した粉青とともに、少数の刷毛目粉青。 **第 1 群**；印花で、器種には大接と皿がある。**第 2 群**；陰刻の瓦線文上に刷毛で白土粉粧した粉青で、大接と皿がある。**その他**；象嵌の魚文鉢や彫花の雷門を施した祭器など。
粉青 3 号窯址	雲垈里	印花、刷毛目、**粉引**、彫花などがある。なかでも印花が一番多い。 **第 1 群**；印花の後、刷毛で白化粧した粉青。大接と皿が大多数を占めるが、馬上盃、硯などもある。**第 2 群**；刷毛目と**粉引**技法でだけで飾られた粉青と、彫花技法で各種文様が施された粉青。大接、皿、鉢、瓶、甕などがある。**第 3 群**；内面に陰刻の線文や瓦線文または波濤文が施され、その上に刷毛目で白土粉粧された粉青で大接と皿がある。
粉青 4 号窯址	雲垈里	**粉引**が多いが、少量の刷毛目粉青と白磁がある。器の種類は、粉引の大接と皿が多いが、壺と瓶などもある。白磁は、胎土の粒子が緻密で純白色、釉薬は緑が少し漂う灰色の透明釉で粉青沙器の釉薬のように見える。
粉青 5 号窯址	雲垈里	印花と**粉引**があるが、量が少なくて性格の把握が不可能。
粉青 6 号窯址	雲垈里	**粉引**技法で白土粉粧された粉青沙器で、大接と皿がある。高台周り

		の土が露呈した大接片がある。
粉青 7 号窯址	雲堡里	刷毛目と**粉引**が大部分だが、印花も少し見られる。 **第１群**；印花で、大接、皿、馬上盃などがある。**第２群**；陰刻の瓦線文上に刷毛で白土粉粧した粉青で、大接と皿がある。**第３群**；単純な刷毛目と、刷毛による白化粧の後に彫花や剥地技法で文様を施した粉青。**第４群**；**粉引**で、大接、皿、縁付き皿、鉢、平碗、盞、瓶、小瓶、俵壺などがある。高台周りの土の露呈したものもある。**鉄絵**
粉青 8 号窯址	雲堡里	印花で、器の種類は大接と皿のみ。
粉青 9 号窯址	雲堡里	大部分が**粉引**で、刷毛目がわずかにある。器種は大接と皿が大部分で、瓶や杯等が少し製作されたように見える。高台周りの土の露呈した器もある。（**白磁**も併せて燔造）
粉青 10 号窯址	雲堡里	刷毛目と**粉引**が共存。刷毛で粉粧された粉青は、彫花技法で文様が施されたものも、**鉄絵粉青の陶片も 1 点採集**されている。**第１群**；刷毛目と、その上に彫花技法で文様が施されたもの。大接、皿、鉢、瓶など。**第２群**；**粉引**で、大接、皿、瓶などがある。
粉青 11 号窯址	雲堡里	**粉引**が主体だが、刷毛目の大接が 1 点発見された。大接と皿が大部分を占め、極めて少数の扁壺がある。
粉青 12 号窯址	雲堡里	大部分が印花技法の大接と皿で、少数の刷毛目と**粉引**がある。**第１群**；印花技法の大接、皿、碗、馬上盃など。**第２群**；:陰刻で線文を施した後に刷毛で白土粉粧した大接と皿。**第３群**；**粉引**。10 点ほどの大接や瓶などがある。**その他**；刷毛目
粉青 13 号窯址	雲堡里	印花、刷毛目、**粉引**が多数発見されるが、刷毛目が多い。 **第１群**；印花を施した大接、皿、平碗など。**第２群**；器の内面に陰刻の瓦線文を回し、その上に刷毛で白土粉粧した大接、皿、平碗など。**第３群**；刷毛目の大接と皿。**第 4 群**；**粉引**の鉢、皿、小皿、瓶など。
粉青 14 号窯址	雲堡里	刷毛目と粉引で、**粉引**が全体の約 60%を占め、器種も、刷毛目粉青に比べて多様。**第１群**；刷毛目で、大接と皿がある。**第２群**；**粉引**で、大接、皿、鉢、盒、祭器などがある。
粉青 15 号窯址	雲堡里	印花の窯址だが面象嵌もあり、刷毛目と**粉引**も多少見られる。器種は大接、皿、杯、瓶、壺、甕などがある。
粉青 16 号窯址	雲堡里	印花を主とする窯址だが、多少の刷毛目と**粉引**、彫花、象嵌粉青が見られる。**第１群**；印花の施された器で、大接と皿類が大部分だが、馬上杯、瓶なども少しある。**第２群**；刷毛目、**粉引**、彫花に粉粧の施された粉青で、大接、皿、鉢、瓶、壺、甕などがあるが、形も小さく量も少ない。
粉青 17 号窯址	雲堡里	刷毛目とともに、極めて少数の**粉引**が見られる。器種には、大接、皿、平碗、魚網錘などがある。
粉青 18 号窯址	雲堡里	**粉引**が主流だが、刷毛目もわずかに見られる。器種には、大接、皿、碗、盒、瓶、小瓶、扁壺などがある。
粉青 19 号窯址	雲堡里	刷毛目が大部分で、少量の印花と**粉引**があるが作りは基本的に同じで、彫花粉青もある。**第１群**；印花の大接と皿がある。**第２群**；刷毛目の大接と皿があり、文様はない。**その他**；彫花の甕と瓶、**粉引**の大接、皿などがある。

粉青 20 号窯址	雲垈里	刷毛目が大部分で、**粉引**もわずかにある。 **第１群**；刷毛目の大接と皿。**第２群**；**粉引**の大接、皿、盒など。その他、彫花の大接と瓶の陶片。
粉青 21 号窯址	雲垈里	印花が主流だが、剥地や彫花もわずかにある。 **第１群**；印花で装飾の施された粉青で、大接、皿、馬上盃がある。 **第２群**；彫花と剥地の鉢と瓶。**第３群**；大接と皿など内面に陰刻の瓦線文が回り、その上を刷毛で白土粉粧した粉青が、ごくわずかに見られる。
粉青 22 号窯址	雲垈里	印花で飾られた粉青が主流だが、彫花と陰刻の瓦線文上に刷毛で白土粉粧した粉青もある。**第１群**；印花で、大接、皿、馬上盃、甕などがある。**その他**；瓦線文上に刷毛で白土粉粧した大接。彫花の大接と鉢。素焼きだが、彫花で牡丹と魚文が施された甕、鉢、瓶など。刷毛で全面に白土粉粧し、剥地で牡丹文を描き、下部に蓮弁文を彫花で描いた瓶がある。
粉青 23 号窯址	雲垈里	印花または陰刻の瓦線文の上に刷毛で白土粉粧した大接、皿が大部分で、他の窯址に比べて陰刻の技法を使用した粉青が多数発見される。
粉青 24 号窯址	雲垈里	印花が一番多く、陰刻の瓦線文の上に刷毛で白土粉粧した粉青も少し見られる。器種には、大接、皿、鉢などがある。
粉青 25 号窯址	雲垈里	印花と陰刻の瓦線文の上に刷毛で白土粉粧した粉青の大接、皿が多い。他に、瓦線文と雨点文などを組み合わせた大接、皿、瓶がある。
第二次調査青磁 1 号窯址	蓬莱面新錦里	こちらで露出した青磁片の量は非常に少なく、大きさも小さいので、その性格の把握は難しい。
第二次調査青磁 2 号窯址	蓬莱面新錦里	器種は、大接と皿が大部分。胎土は、灰色で砂がまじている。釉薬は高台内までかけられ、光沢があり、灰色がかった青色を帯びる。器種は、大接、皿、碗。
第二次調査青磁 3 号窯址	蓬莱面新錦里	全体的な様相は 2 号窯址の出土陶片とよく似ている。
第二次調査粉青 1 号窯址	豆原面龍頭里	印花技法が主流である。器種は、大接と皿類が大部分だが、瓶と甕が少しある。胎土は砂が混じり、濃い灰色を帯びることが多い。胎土内に気泡があり、鉄分の斑点が現れることもある。釉薬は半透名釉で、灰色を帯びることが多いが、時には茶色の釉相を見せることもある。高台内まで釉薬がまわることは稀で、大部分の高台内には釉薬がかけられていない。 文様は、大接と皿の場合は、主に内側のみで、外側には文様がないか、簡単な線文があるだけだ。印花が主で、象嵌は少ない。印花の文様は、単独菊花文、集団菊花文、蓮弁文、蝶文、蓮弁文などがある。印花された菊花文には、雲垈里と同じく中心の花芯に＋の印が施されることが多い。 印花施文後の白土嵌めこみには、刷毛で白土をかけるので、印花された文様が鮮かではなく、文様以外の器面に白土や刷毛目などが残り、全体的にきれいではない。 象嵌技法は、大接や皿の従属文様に主に使用された。口縁部の主文帯や外面の線文、内面全体に施された瓦線文などがある。象嵌方法も印花技法と同じく刷毛で白土を嵌めこみ、文様以外の部分を拭き上げなかったので、刷毛目の跡が残る。 高台は、直立したタリ高台か、竹の節高台だが、タリ高台の方が多

		く、高台は内側に傾斜したものと直立したものがある。大接や皿などの器は、重ね焼きされ、匣鉢は発見されない。重ね焼きには、大き目の胎土目が 3～4 個使用された。[8]
第二次調査粉青 2 号窯址	占岩面淵鳳里逢福	刷毛目と**粉引**の窯址。刷毛目が多く、器類は大接、皿、平碗、小瓶、瓶、甕などがある。 胎土は、濃い灰色を帯び、砂がまじる。釉薬は青色が漂う明るい灰色の半失透性で、高台内まで加えられている。胎土と釉薬内には、微細な気泡が非常に多い。白土粉粧は刷毛目粉青の場合、内面全体と外面上部施されているが、あと半分は一度の筆づかいで、速度感がある。 粉引は、雲垈里窯址と同じく、高台内まで全面が白土粉粧され、外面の色が全体的に薄黄色を帯びている。文様は、彫花技法による線文と雲文などで、非常に珍しく、刷毛目だけに見られる。高台は、手早い仕事で、高台内中心部がふくらむ場合が多い（兜巾）。竹の節高台が多いが、内に傾斜した高台もある。大接と皿は、すべて重ね焼きで、砂目が 5 から 7 個ある。
第二次調査粉青 3 号窯址	占岩面淵鳳里ヨンジョン	器類は大接と皿が大部分で、ほかに小瓶が何点かある。 胎土は、緻密で濃い灰色または灰黒色。文様は、象嵌や印花で、まばらだ。印花の菊花文、象嵌技法の蓮弁文、線文など単純なものが多い。大接と皿の文様は内側面にだけ施され、線文が多い。釉薬は清く透明で緑が漂う灰青色と灰色が濃く濁るものがある。 高台は、竹の節高台が主流で、大接と皿の場合には高台際と内部には釉薬が加えられない。すべての器は重ね焼きで、太い胎土目が 4 ヶ所ほどある。大部分の大接と皿は、高台内に押し堅めた跡がある。

寶城窯址調査

窯址	場所	陶片の性格
粉青 1 号窯址	筏橋邑永登里	陶片が細かく壊れて、器の形態や種類の把握が難しい。 器の種類は、大接と皿類が主流で、馬上盃や甕などと思われる小さな陶片もある。胎土は、比較的精製されているが、少し砂が混じり、濃い灰色や灰黒色のような暗い色合いが主流を成す。釉薬は濁って暗い灰青色系列が多いが、明るい半透明釉も少しある。高台内まで釉薬がかかるが、一部に高台内の釉薬がないものもある。 文様のある器はあまり多くないが、印花と象嵌が使用される。印花は菊文と三円文、象嵌は主文帯のほかに、白象嵌の線文だけのもある。概して大接と皿の内面の文様はまばらだ。高台は竹の節高台で、大部分が内傾している。大接や皿は、すべて重ね焼きで、胎土目が 3～4 個使用されている。一部に高台内を押し堅めたものもある。
白磁 1 号窯址	筏橋邑馬洞里	器の種類は大接と皿、平碗、杯などがある。胎土は緻密で、灰色や明るい灰色を帯びる。すべての器は、柔らかい彎曲線から成り、口縁部は広く開いている。釉薬は、濁っているが青を含んだ明るい灰色を帯びる。 高台は、タリ高台とオモク高台の二つの種類があるが、タリ高台は全体の 10%にすぎず、オモク高台が大部分だ。大接や皿などの器は、皆重ね焼きで、胎土目だ。胎土目は器の種類によって大きさが違い、大接の場合は 5 個で大きい。皿や杯などの小さな器は、3～4 個で小

		さい。
白磁 2 号窯址（朝鮮時代後期）	栗奉面長洞里	器の種類は大接と皿が主流だが、平碗と杯が少しある。 胎土は、灰白色と灰色を帯びて、緻密だ。釉薬は半失透性の明るい灰青色で、高台内まで加えられている。高台はオモク高台が一般的だ。すべての器は重ね焼きで、砂のような珪石の目が使用される。数は 5 個位。
白磁 3 号窯址	栗面柳新里	器種は、大接と皿、平碗、杯など。胎土は、微細な気泡とともに鉄分の斑点が多い。概して灰色を帯びるが明るい灰白色もある。釉薬は高台内までかかり、青色が漂う灰色釉で、少しの黄色が漂うこともある。主な高台形式は、オモク高台。大接と皿類などの器は、皆重ね焼きで、胎土目。胎土目は、器の大きさによって大きさが違い、4 個から 6 個だ。
白磁 4 号窯址（朝鮮時代後期）	文徳面亀山里	器の種類は、飯碗、大接、皿、平碗、杯などがある。 緻密質の精選された胎土で、明るい灰色や灰白色を帯びる。 釉薬は高台内までかかり、明るい灰青色系列であり、微細な鉄分の斑点がある。高台には、オモク高台、オモク高台の変形、平底高台などがある。みな重ね焼きで、珪石の目が使われている。 珪石は、砂目のように何箇所かに分けておく場合と、丸く敷くことがある。
白磁 5 号窯址（近代）	文徳面亀山里	器種は、大接と皿が主流で、ほかに平碗や祭器などがある。全般的に器が厚くて、線も粗悪で鈍重な感じがする。 胎土は精選されて、緻密で明るい灰色を帯びる。釉薬は明るい灰青色と灰色で、光沢があり、高台内まで加えられている。釉面に鉄分の斑点がある。高台は、器の大きさに比べて径が非常に広い。すべての器は重ね焼きで、砂目支えだ。
白磁 6 号窯址（朝鮮時代後期）	福内面日鳳里	器類は、飯碗、大接、皿、平碗、杯などで、大接と皿が一番多い。胎土は緻密で、非常に精選され、清い灰白色を帯びる。高台はオモク高台と平底高台がある。平底高台は杯のみに見られる。器は重ね焼きで、珪石目だ。
白磁 7 号窯址（朝鮮時代中期）	福内面眞鳳里	器種は、大接、皿、平碗など。胎土は、砂が極少量含まれているが緻密だ。鉄分の斑点があって、濃い灰色を帯びる。 釉薬は高台内まで加えられ、青色が漂う暗い灰色が多い。 高台は典型的なオモク高台。すべての器は、重ね焼きで、胎土目だ。数は 4～5 個で、器によってその大きさが違う。
白磁 8 号窯址（朝鮮時代後期）	葦洞面感情里	器の種類は大接、皿、平碗等で、口縁部分だけの甕もある。 胎土には砂が混じっているが、概して精選され明るい灰色を帯びる。粒子が緻密で微細な鉄分の斑点が含まれている。 釉薬は高台内まですべて等しく加えら、釉色は青色の漂う灰色が多く、まれに茶色や黄色味を帯びることもある。量は少ないが、鉄絵もある。 高台には、オモク高台と変形したオモク高台がある。 珪石を床にざっと丸く敷いたり、砂目のように数箇所を支えたりして焼成。
粉青 2 号窯址	得糧面正興里	大部分の器には、文様がない。器種は、大接と皿などで、単純な内容を見せる。胎土は、濃い灰色を帯び、砂粒がまじり、微細な気孔と鉄分の斑点が現われる。釉薬は、灰青色を帯び、灰色が濁ると緑に見えることもある。時には、茶色が漂うこともあり、全般的に釉薬が非常

		に暗い色を帯びることがある。文様は、一部の限られた大接と皿の内外面に施され、施文技法は印花が主だ。一番多いのは、器面にまばらに施された菊花文で、口縁部には唐草文が象嵌されることもある。ほかに輪をつないだような唐草文様と、従属文様としての蓮弁文がある。 高台はタリ高台と竹の節高台の二種類があり、後者が多い。 多くの器の高台内に、竹箆のような道具で押した跡がある。 大接と皿などは、すべて重ね焼きで、太い胎土目が使用使された。
粉青 3 号窯址	得糧面道村里	ウィサグチョムコル（上沙器谷）と呼ばれる。 主な粉粧技法は**粉引**で、刷毛目が少量見られる。器種は、大接と皿、平碗、杯、甕などがある。胎土は、砂粒子が混じり、茶色を帯びた灰色や灰黒色で、全般的に濃い。釉薬は、高台内まで加えられ、灰褐色系統の半透明釉だ。白土粉粧は、ほとんど粉引で、刷毛目は二片しか収集できなかった。粉引の場合、高台内まで全面が白土粉粧され、粉粧された白土は磁化せず、胎土から遊離して剥落することがある。文様があるのは一点だけで、皿に**鉄絵**技法で文様が描かれていた。 器の外形上の共通した特徴は、側面の線が彎曲して、口が広く広がっている。高台は竹の節高台とタリ高台があり、竹の節高台が多い。二つの器種とも、器の大きさに比べて高台は低く小さく、高台内の中心が突き出している（いわゆる兜巾高台）。大接と皿は、重ね焼きされ、土砂の支えが使用された。黒い目跡が、内底や高台の畳つきに丸く残り、5 個から 9 個くらいある。
粉青 4 号窯址	得糧面道村里	サグチョムコル（沙器谷）と呼ばれる。 **粉引**が主流の窯址だが、ウィサグチョムコルに比べて、刷毛目も多く見られる。器種には、大接、皿、盒、飯碗、杯などがある。釉薬や器型など全般的な性格は、前の窯址（ウィサクチョムコル）で出土したものと似ているが、高台にはずんぐりしたタリ高台が多く、その真ん中を丹念に削ったものも、かなり多く見られる。 大接は、外形によって二種類ある。第一は、口縁が広がって、側面の曲線 S 字形だ。第二は、側面の線が斜線に近い。 前者は内面が広いが、後者は狭くて、見込みに丸い鏡があり、陰刻線が一本回される。

長興窯址調査

窯址	場所	陶片の特徴
白磁 1 号窯址（朝鮮時代中期）	長平面復興里 1 号	器種は、大接と皿が主流で、ほかに平碗、杯などがある。 胎土は、緻密で、比較的精選されている。釉薬は、高台内までかかり、濃い灰色が多いが、青味がかった清い灰色を帯びることもある。 高台はオモク高台で低く、高台と器体との境界が比較的明確だ。すべての器は、重ね焼きであり、胎土目が 4～5 個使用された。
白磁 2 号窯址（朝鮮時代）	長平面復興里 2 号	器種は、大接、皿、平碗などがある。胎土は精選され、灰色や濃い灰色を帯び、概して暗い色合いである。 釉薬は青味がかった灰色で、高台内までかかる。 高台は、オモク高台。すべての器は重ね焼きで、胎土目。
白磁 3 号窯址（朝鮮時代中	長平面オゴク里 1 号	器種は、大接、皿が主流で、ほかに平碗などもある。 胎土は灰白色、灰色、濃い灰色を帯びるが、なかでも明るい灰白色が

期）		多い。釉薬は高台内までかけられ、青味がかった灰色で明るい。高台は、タリ高台とオモク高台があり、オモク高台が 65%を占め、タリ高台がオモク高台に変化していく段階であることが分かる。全般的に、器面が非常に精製され、高台も丹念で、丁寧に製作していることが分かる。大接や皿などの器は、みな重ね焼きで、胎土目が 5 個位である。
白磁 4 号窯址（朝鮮時代中期）	長平面オゴク里 2 号	器種は飯碗、大接、皿、平碗、杯などがある。 胎土は粒子がきれいで、精選され、灰白色、濃い灰色、灰色などを帯びるが、灰色が多い。釉薬は青味がかった灰色を帯び、高台内までかけられている。この窯址の白磁は、性格が 1 号窯の窯址出土品と似ているが、釉胎が灰色がより濃い。高台はオモク高台が主流。高台内の中心がふっくらと突き出している（兜巾）。重ね焼きで、胎土目。
白磁 5 号窯址（朝鮮時代）	長平面オゴク里 3 号	器種は、大接、皿、平碗などがある。釉胎は、灰色と灰白色が主流で、全般的に明るい色合を帯びる。高台は典型的なオモク高台。重ね焼きのため、胎土目がある。
白磁 6 号窯址（朝鮮時代）	長平面オゴク里 4 号	器種は、大接、皿、平碗、盒、杯などで、大接がほとんどである。胎土は緻密で、比較的灰色が濃く、多くの鉄分斑点がある。釉薬は、高台内まで加えられたが、高台周りに釉薬がないこともある。釉色は、青味がかった濃い灰色を帯びるが、黄色がかることもある。高台は、形態が多様で典型的なオモク高台があるが、変形オモク高台や平底高台などもある。すべての器は重ね焼きで、胎土目 4～5 個である。
白磁 7 号窯址（朝鮮時代中期）	長平面青龍里	オモク高台白磁窯址。器種は、飯碗、大接、皿、平碗などで、大接と皿が主流をなす。釉胎は青味がかった灰色を帯びて釉薬は高台内までかけられている。高台は、オモク高台と変形オモク高台がある。 重ね焼きで、胎土目は 4～5 個。
白磁 8 号窯址（朝鮮時代後期）	長平面牛山里 1 号	器種は、大接、皿、平碗、杯などがある。釉薬は、濃い灰色を帯び、高台内まで釉薬が加えられている。器壁が厚く、全体的に鈍重な感じを与える。器面が精製されず、鉄分の斑点が現われる。高台は平底高台とタリ高台があり、平底高台が全体の 75%を占める。すべて重ね焼きで、珪石粒の目がある。
白磁 9 号窯址（朝鮮時代後期）	長平面牛山里 2 号	器種は大接、皿、平碗、杯、甕などがある。釉胎は、青味がかった明るい灰色が大部分で濃い灰色もある。高台は平底高台が主流で、タリ高台もあるが少ない。すべて重ね焼きで、珪石粒が主流で、わずかに胎土目が使われた。
白磁 10 号窯址（朝鮮時代後期）	長平面牛山里 3 号	器種は飯碗、大接、皿、平碗、杯などがあり、大接と皿が主流をなす。釉薬は、濃い灰色もあるが全般的に青味かかった灰色を帯びて、高台内まで加えられた。高台は、平底高台とオモク高台がある。少数だが、前の時期の窯址では見られない独特の高台もある。すべて重ね焼きで、珪石使用。
白磁 11 号窯址（朝鮮時代）	有治面龍門里 1 号	器種は、大接、皿、平碗、杯など。釉薬は明るい灰色が多く、一部に灰色もある。釉薬は高台内まで加えられた。高台は変形オモク高台が大部分で、杯などに平底高台もある。 すべて重ね焼きで、比較的小さい胎土目を 4～5 個位使用。
白磁 12 号窯址（朝鮮時代）	有治面龍門里 2 号	器種は、大接、皿、平碗、杯など。釉薬は濃い灰色を帯び、高台内まで釉薬がかかる。変形オモク高台が多いが、平底高台もある。重ね焼きで、胎土目を 5 ヶ所ほど使用。
白磁 13 号	有治面龍門里 3 号	器種は大接、皿、平碗、杯など。釉胎は濃い灰色が主流で、ベージュ

窯址（朝鮮時代中期）		系統や明るい灰色を帯びることもあり、釉薬が高台内までかかる。高台は、変形オモク高台だが、杯には平底高台がある。すべて重ね焼きで、胎土目。
白磁 14 号窯址（朝鮮時代中期）	有治面龍門里 4 号	器種は、大接と皿が主流だが、平碗、杯、甕などがある。釉薬は、濃い灰色が主で、高台内まで釉薬がかけられる。高台は変形オモク高台が多い。平底高台もあるが、杯のみだ。重ね焼きで、胎土目で、4～5 個位。
白磁 15 号窯址（朝鮮時代中期）	有治面鳳徳里	器種は大接、皿、平碗、杯、瓶など。釉胎は濃い灰色系列で、高台内までかけられている。高台は、変形オモク高台が主流で、平底高台もある。重ね焼きで、胎土目が使用された。
粉青 1 号窯址	長東面龍谷里	**粉青沙器**、**軟質白磁**、**青磁**を併せて出土する。 器種は大接、皿、平碗、祭器、俵壺、甕、盒、馬上盃など、非常に多様だ。胎土は、粒子が精選され、微細な気泡があり、濃い灰青色系列の暗い色合いだ。 釉色は、緑色がかった灰青色を帯び、高台内は大部分釉薬が加えらていない。器面に文様が施されることが多く、粉青沙器には、象嵌、印花、彫花、剥地技法が使用され、青磁には陰刻の文様がある。 文様の種類は、象嵌の場合、龍文と蓮華文、蓮弁文、幾何学(線)文、彫花文などがあり、**龍文は黒白象嵌**されている。 印花技法に施文された文様は、歯車型の菊花文、三円文、六円文、蓮弁文、蝶文、連圏文などがある。剥地では、牡丹文があり、彫花には、牡丹文と雷文がある。 粉青沙器の外に、青磁と白磁が一緒に出土するが、量はとても少ない。**青磁**は、胎土が粒子が緻密で、灰青色を帯び、端正な造りだ。青磁のうちには、陰刻文様もある。 胎土や釉薬は粉青沙器のようだが、白土粉粧や文様が全然ないものもある。胎土は、概して砂粒がまじり、質がよくない。焼成時には、匣鉢を用いることもあるが、多くは重ね焼きで、胎土目が使用された。**白磁**は、小さな陶片が 5 つだけ発見された。軟質白磁で、胎土は白色だが、青磁釉が着せられたものもある。皿や馬上盃がある。
白磁 16 号窯址（朝鮮時代中期）	長東面龍谷里白	器種は大接、皿、平碗などがある。釉胎は濃い灰色が多く、釉薬は高台内までかけられている。タリ高台とオモク高台があり、タリ高台が全体の 60%で多い。高台直径が広い。大接と皿などの器は重ね焼きで、胎土目を使用。
白磁 17 号窯址（朝鮮時代中期）	夫山面龍反里	器種は大接と皿、平碗、甕などがある。釉薬は青味がかった灰色系列が多く、高台内まで釉薬がかかる。高台は典型的なオモク高台だが、変形オモク高台もある。胎土目は、4～6 個。
白磁 18 号窯址（朝鮮時代前期）	安良面ヘチァン里	長興郡に分布する白磁窯中一番早い時期の窯址。 器種は、大接、皿、平碗などがある。釉胎は、灰色がかった白色とベージュ系列の明るい色があり、灰色系列もある。釉薬は高台内までかかっている。大接や皿などの内底に、高台直径より広い丸い削り込（鏡）がある。側面の線は湾曲線で、口縁は広がっている。高台はタリ高台が大部分で、竹の節高台もあり、すべて内傾している。重ね焼きの場合、土砂目で、内底と高台接地面に丸く跡を残すが目の数は分からない。 大略的な特徴は、大接の場合、高台からの線が彎曲し、内底に浅い丸い削り込（鏡）ができることがある。皿は、口縁が広く広がり側面線

		が彎曲する。高台は低く、皿の大きさに比べて広い。平碗は、口縁が広く平たいか、直線状のものがある。高台は竹の節高台が多い。トチンは高くて丸く、厚さの差がある。下の面より上の面が広い。
青磁 1 号窯址	龍山面豊吉里	蛇の目高台の青磁碗が出土した所で、器種は大接、皿、碗などがあり、甕のような大きい器の小さな陶片もある。その他に、円筒状の匣鉢と匣鉢の支えも大量に発見された。 器は、大部分が小さくて、器の形が分かるものは 2、3 点に過ぎない。 青磁の胎土には、細かい砂粒がまじり、気泡があり、濃い灰青色を呈し、釉色は透明な緑青色と緑褐色などが多く、青味がかった灰色もあるが濁っている。また、胎土がきれいで、釉色がオリーブグリーンを帯びることもある。釉薬の溶融状態が悪くて、器面に斑点や溜りができることがある。 釉薬は高台内までかかり、高台の畳みつきは、焼成のために釉が拭き取られている。重ね焼きはなかった。
粉青 2 号窯址	龍山面チョプチョン里	朝鮮時代前期の刷毛目粉青沙器窯址。器種は大接、皿、甕などがあり、文房具の硯もある。 陶片が細くこわれて、器の形が分からないが、側面線は直線で、口縁は軽く開いているように見える。 胎土は、濃い灰色や灰黒色、灰褐色などの暗い色合いで、砂粒がたくさんまじる。器面には、高台周辺を除いた全面に刷毛で白土粉粧された荒い刷毛目跡がはっきり見える。釉薬は高台内や高台周辺には加えられない。 高台は、タリ高台が多く、竹の節高台もある。高台を削りだす時に生じた時計方向の螺旋が鮮かで、高台削りの腕がよい。大接、皿などの器は、みな重ね焼きで、土砂目跡は 4～6 個だ。
白磁 19 号窯址（近代）	龍山面月松里	器種は飯碗、大接、皿、小碗などがある。 釉薬は灰色を帯びるが、青味がかった灰色や濃い灰色もある。釉薬は高台内まで加えられた。器壁が厚くて線が単調で全体的に鈍重な感じを与えるが、このような点はこの時期に製作された地方白磁に共通の特徴だ。高台は、タリ高台で、高台内中心がふっくらと突き出している（兜巾）。大きさに比べて高台直径が広い。重ね焼きで、荒い土砂目の跡が残る。
白磁 20 号窯址（近代）	冠山邑夫平里	器種は、大接、皿、平碗、杯、祭器などがある。釉胎は明るい灰色や、青味がかった濃い灰色を帯びて、高台内まで釉薬がかかる。器は、器壁が厚いだけでなく全体的な線の傾斜が直線で、鈍重な感じを与える。高台はタリ高台。高台内の中心が突き出す（兜巾）。重ね焼きで、土砂目跡が内底に丸く残る。
白磁 21 号窯址（朝鮮時代中期）	冠山邑龍田里 1 号	器種は大接、皿、平碗、杯などで、少量だが素焼き片がある。 胎土は、灰色を帯び、砂粒が少しまじって微細な気泡が多い。 釉色は青味の少し加わった濃い灰色で、高台内まで釉薬が加えられている。高台はオモク高台や変形オモク高台だ。 すべての器は胎土目を使用して重ね焼きされている。 重ね焼きをする時に一番下に置かれる器は、高台に釉薬が加えられず砂が付いている。
白磁 22 号窯址（朝鮮時代中期）	冠山邑龍田里 2 号	器種は飯碗、大接、皿、小碗、杯などがあり、大接と皿類が主流だ。胎土は比較的精選され、粒子が緻密で、明るいか濃い灰色だ。器壁の厚さが薄くて、床は比較的厚い。

		釉薬は、大部分高台内まですべて等しく加えられているが、高台接地面の釉薬が拭き取られたものも何点かある。 釉面に光沢があり、釉色は青味がかった濃い灰色を帯びるが、明るい灰色を帯びることもある。器の全面に鉄分の斑点と気泡がある。内底に浅い丸い削り込（鏡）があり、その直径は高台直径より広い。高台はオモク高台と変形オモク高台がある。すべての器は重ね焼きで、小さな胎土目が使用され、その数は4～5個位。
白磁23号窯址（朝鮮時代中期）	冠山邑龍田里3号	器の形態や製作方法から見て1、2号窯址より遅い時期に製作活動をしたと思われる。器種は大接と皿、平碗など。 釉胎は濃い灰色を帯び、釉薬は高台内までかかっている。内底には丸い削り込（鏡）がある。高台は、変形オモク高台だ。胎土目で6個位使用された。
白磁24号窯址（朝鮮時代中期）	大徳邑蓮亭里1号	器種は、大接、皿、平碗、杯、甕がある。 胎土は粒子が緻密で、微細な鉄分の斑点がたくさん現われ、色相は明るい灰色から濃い灰色に至るまで多様だ。 釉薬は高台内まで加えられ、青味がかった灰色を帯びるが、一部には釉薬が黄色味を帯びたものもある。大接と皿などの内底に丸い削り込（鏡）がある。口縁部が広く開け、器壁線は彎曲した柔らかい線より、直線的。高台は、高台内が浅く刈られた変形オモク高台。大接、皿などは、みな重ね焼きで、胎土目を使用。
白磁25号窯址（朝鮮時代）	大徳邑蓮亭里2号	器の主流は、大接、皿、鐘子、盒、杯、甕などで、胎土には、砂が一部まじるが、概して精選され、粒子が緻密で、明るい灰青色を帯びる。釉薬は高台内までかけられていて、胎土と同じく灰青色を見せる。釉面には気泡や鉄分の斑点が現われ、胎土目を使用した重ね焼だ。器の大部分を占める大接と皿には、内底に丸い削り込（鏡）があり、高台はオモク高台だ。内底の丸い削り込（鏡）は、高台直径より広い。高台は、内側がぺこんと削られたオモク高台や、高台内が浅く刈られられたものが多く、オモク高台の変化過程を示すものと思われる。焼成すると内側に内傾し、大きさが小さくて高さも低い。 白磁片のなかには、施釉されていないものが何点かあり、大部分が素焼きだと考えられる。
白磁26号窯址（朝鮮時代中期）	大徳邑蓮亭里3号	器種は、大接、皿、平碗、杯、瓶などがある胎土は濃い灰色を帯び、微細な気泡と鉄分の斑点がある。釉薬は青味がかった灰色で高台内までかかる。器体に、轆轤の跡があり、高台周辺は釉薬がたまり、固まった部分もあって、全般的に器面がきれいでない。高台内が浅く刈られて、接地面の幅が一定しない変形オモク高台。胎土目を使用した重ね焼き。

姜大奎等を中心として、二次にわたる調査をおこなった研究チームは、以上の結果を、次のようにまとめている。(9)

2-1　高興郡

高興郡には、豆原面雲垈里に青磁窯址5基、粉青沙器窯址25基など30基に達する窯址が分布している。雲垈里以外の地域で調査された窯址は、高麗王朝時代の青磁窯址3基と、朝鮮王

朝時代の粉青沙器窯 3 基である。なかでも、青磁窯址は高麗青磁発生段階の窯で、初期青磁の様相を示す重要な窯址である。

粉青沙器窯址は、朝鮮時代 15 世紀後半頃から製作活動を開始した全南地方の粉青沙器の特徴を代表する窯であるだけでなく、粉青沙器から白磁に移るプロセスをよく示している。

2-1-1　青磁窯址

雲垈里地域の青磁窯址には、つぎのような特徴がある。

1．雲垈里地域に分布する青磁窯址ではすべて黒釉陶が一緒に発見され、韓国における黒釉陶の製作が青磁の初期段階にすでに始まっていることが確認される。

2．青磁の一般的な特徴としては、各窯址で出土する青磁の胎土が濃い灰色や灰褐色を帯び、多くの気泡があって粒子が緻密ではない。形態においては土器の器型が多く残存し、碗の場合、内底に丸い削り込（鏡）があるものが大部分を占める。碗は焼成時に、一匣鉢内に一つずつ焼くことが一般的だが、重ね焼きしたものも見られる。

3．青磁窯址のうちで、初期型の蛇の目高台碗が出土する 1 号窯址が一番早い時期で、高台幅が 1 号窯址に比べて小さい蛇の目高台碗が発見される 2 号窯址が次の時期である。
高台幅が一番狭くなる変形蛇の目高台の 4 号窯址は、蛇の目高台碗が出土する窯址の中で一番遅い時期と思われる。その他 2 基の緑青磁窯址は、官衙に納める青磁の生産が康津や扶安に集中した後に、地域の需要に応じた窯址である。1、2、4 号窯の製作技術がよく残っている 3 号窯が、5 号窯に比べて先行すると考えられる。

4．製作時期は、雲垈里青磁窯址の中で最も先行すると考えられる 1 号窯址が、高敞郡龍渓里窯址で出土した青磁に比べると、土器の形態が多く残る大接の存在や蛇の目高台碗の形式から推定し、より早い時期に製作を開始したと考えられる。最後の時期に製作活動を行った 5 号窯址の場合には、10～11 世紀と推定される海南郡珍山里と同じタイプの変形蛇の目高台碗が出土する。したがって雲垈里地域の青磁窯の全体的な時期幅は 9 世紀後半から 10 世紀後半までと思われる。

5．雲垈里以外の青磁窯址は、胎土や釉薬の質が落ちた青磁で、康津や扶安に中央向けの青磁製造が集中した後に、地域の需要にこたえるために作られたと思われる。一般的な性格を要約すると、器種は大接や皿類など単純で、すべて重ね焼きである。高台は、内傾したタリ高台が多く、竹の節高台と平底もあるが、平底の場合、床内が少し持ち上がっている。文様のあるものは、一点も見つけることができなかった。壺と大接の内側面の口縁近くに一、二行の陰刻線を回したのが全てである。このようなタイプの青磁は、蛇の目高台が完全に終わる次段階で、その製作時期は 11 世紀頃と推定される。

2-1-2　粉青沙器窯址

雲垈里の 25 の窯址で出土した粉青沙器には、象嵌、印花、彫花、剥地、刷毛目、粉引など粉青沙器のほとんどすべての技法が見られる。さらに、ごくわずかだが鉄絵文様の粉青が、10 号窯址で 1 点、7 号窯址で 3 から 4 点発見されている。雲垈里一帯の鉄絵は、刷毛目ではなく粉引の上に施文されているのが特徴である。

胎土は灰色や灰青色を帯びるが、粉引や刷毛目の場合は、濃い灰色や灰黒色を帯び、青磁と同じく多くの気泡がある。

器の形態は、大接や皿が主で、大部分の口縁は広がって、高台は低い竹の節高台だが、粉引の場合は高くて垂直に立った高台も多く、形態上の変化がある。

焼成時には、胎土目や砂目を差し、すべて重ねて焼かれたが、胎土目が使用されたのは 16 号と 24 号窯址のみで、その外は砂目が使用された。

文様は、大接と皿の場合ほとんど大部分が内面に配置され、多様な文様が施されている。文様の中で一番特徴的なのは、乗簾文と波状文である。この文様は印花技法で飾られたすべての窯址で発見され、大接と皿に基本的に使用されている。

大接は、中心文様もあり、皿の場合は、内面の菊花文や十字文を中心に、放射状に施されている。このような文様は粉青沙器窯址のうちでも比較的製作時期の早い全北扶安郡牛東里窯址で出土した大接や皿などに見られるし、全南地方では霊巌キルリョン里窯址と海南墨洞里窯址で発見され、一番よく似ているのは海南墨洞里窯址である。

その他に、特徴的な文様は十字文である。十字文は、先に述べた文様とともに、すべての印花窯址で発見されている。大接と皿の内面の中心文様に用いられ、菊花文にも中央に十字文があることがある。このような十字文は海南墨洞里窯址を除き、ほかの地方で発見された例がない。

印花技法で飾られた文様の上には、大部分が刷毛目で白土粉粧され、文様の上に刷毛目跡が残り、これによって文様が覆われることが多い。これは地方の需要に応じた大量生産を目的としたと思われる。白土象嵌に比べて手軽で、作業工程も簡単で、短時間に多くの陶磁器が製作されたものと思われる。

器の装飾方法のなかでは、彫花と剥地技法の粉青が 14 の窯址で見られ、これら技法が多く使用されていたことが分かる。それぞれの文様は、基本的に刷毛目の白化粧の上に施され、文様は瓶と甕には牡丹文と牡丹唐草文が多く、大接や皿には、よくわからない文様が手短に施されている。おそらく牡丹や雲文の変形ではないか思われる。大接と皿に施される文様のうちで、牡丹の変形と思われる文様が扶安牛東里窯址で出土した鉢にも見られた。

粉粧技法のもう一つの大きな特徴は、粉引である。一般的な粉引は、内面全体と外面上部だ

けに白化粧されるものだが、雲垈里で製作された粉引は高台内まで釉がまわり、器全体が完全に白土粉粧されて、器の切断面を見なくては白磁との区別ができないほどである。

粉青沙器の製作時期は、決定的な資料を欠くだけでなく、器の形態や文様などの製作時期が分かる銘文資料等が、粉青沙器の初期の 15 世紀中葉以前に集中し、製作時期の推定が困難である。したがって高興雲垈里の粉青沙器は、これに先行する時期に製作されたと思われる扶安郡牛東里窯址をもとに製作時期を推定してみたい。

扶安牛東里の窯址は、世宗実録地理志の記録や <粉青沙器正統五年銘蓮魚文盤形墓誌> などから、1440 年前後から 1450 年頃前後まで 20～30 年間持続した窯址と推定される。その牛東里で製作された粉青沙器の瓶や甕などに象嵌技法で施された牡丹と魚文が、雲垈里 1 号、15 号窯址の瓶や鉢などによく現われ、相互の関係を窺うことができる。

また印花の大接と皿等の中心文様として使用された乗簾文が、牛東里大接に見られるだけではなく、皿にも登場する。その他にも、甕に彫花と剥地技法で施される牡丹文が、雲垈里 22 号窯址で多数発見され、全般にわたって牛東里窯址で出土した粉青沙器と多くの類似点を見つけることができる。したがって、初期段階での雲垈里粉青沙器には、扶安牛東里の粉青沙器の技術が移転したものと考えられ、その製作時期は 15 世紀中葉頃と推定される。雲垈里粉青沙器の下限年代は、現在のところ明確ではない。雲垈里粉青沙器の最後の段階は、おそらく粉粧技法に粉引が使用された窯で、白磁が製作され始めた 4 号と 9 号窯址ではないかと考えられる。しかし既に言及したとおり、器の形態や文様などが分かる銘文資料が 15 世紀中葉以前に限定されており、白磁に対する編年も主として京畿道広州で成り立つだけである。地方白磁の編年が十分に成立していないので、この編年には限界がある。

2-2　寶城郡

寶城郡で調査された窯址は 12 基で、粉青沙器窯址が 4 基、白磁窯址が 8 基ある。

2-2-1　粉青沙器窯址

粉青沙器窯址のうち永登里と正興里は、初期粉青沙器の様相を見せる。収集した陶片が少なくて、しかも細くこわれているので、性格把握は困難だが、朝鮮時代全盛期の印花に至る段階であることが分かる。

器型は、内彎型の大接や器壁が立ち上がった皿など、高麗末の青磁の影響がまだ残っていて、文様にも三円文などのように初期粉青沙器窯址に見られる古い形式がある。文様が施される範囲も、内面は中央部分に集中しているし、外面は主に線文で飾られていて、内外面いっぱいに印花文が施された全盛期のものとはまだ距離がある。

これらの窯址は、蓮唐草文が製作された高麗末青磁の次の段階、またはそれと類似の時期で、

釉色は明るくなったがまだ灰色より緑に近い暗い色である。しかし文様は、印花技法がかなり広がった段階である。大接と皿の文様構成も、たとえ内面に限定されていても、側面が 3 段に分けられ、中心文様帯の幅が広くなっていることが分かる。蓮唐草文が見られる窯よりは遅く、全盛期の印花よりは早い 15 世紀初期と推定してよいだろう。

一方刷毛目と粉引の道村里窯址は、高興雲垈里窯址と多くの類似点があることが分かる。粉粧の中でも粉引技法が代表的である。雲垈里の場合と同じく、白土が高台内まで全面にかかって、割れた面を見なければ白磁と区別ができないほどである。このような特徴は、他の地域の窯址ではその例を捜しにくい。したがって、地理的に接した高興から沙器匠がこちらに移籍して製作したか、それとも技術が移転したか、そのいずれかである。

またわずか一点に過ぎないが、この地方では雲垈里 10 号窯以外には発見されていない鉄絵技法がこちらの窯址でも発見され、二つの地域の関連の強さを窺わせる。

2-2-2　白磁窯址

寶城の白磁窯址は、朝鮮時代前期に製作されたものはなく、すべて壬辰倭乱が終わった後の中期以後に製作されたものである。

このなかでも早いのは、筏橋邑馬洞里と福内面眞鳳里窯址である。大接と皿などの口が自然に広がり、側面線は柔らかい曲線を成す。

高台は、高台内が深く削りこまれ、典型的なオモク高台で編年の基準になるが、前時期のタリ高台も少し見られる。タリ高台からオモク高台に変化する過渡期と思われる。オモク高台は、韓国の白磁編年の基準である京畿道広州窯址の場合、16 世紀末期から少しずつ現れ始め、17 世紀中葉から従属窯で製作された白磁の大部分はオモク高台となる。オモク高台が普遍化した時期は 17 世紀中葉である。しかし寶城郡の場合は、まだオモク高台の前段階のタリ高台が製作されており、これより早い時期であるかもしれないが、地理的に中央から遠く離れ、南端にかたよっている点と、壬辰倭乱で荒廃した地方窯の運営状態から見て、16 世紀末や 17 世紀初まで時期をあげて見ることは難しい。したがって、その製作時期は広州でオモク高台が普遍化した 17 世紀中葉頃と推定する。

この次段階の白磁窯址では、典型的なオモク高台から少し変化し、高台内が浅く刈られて接地面の幅が一定でない高台を持つ白磁が出土する。寶城郡一帯で調査された大部分の白磁窯址がこれである。このような変形オモク高台は、高台表面が偏平な平底高台と伴に出土する。重ね焼きのため、器間に胎土目と珪石粒目が使用されるが、時期的には後者が遅い。

初めのオモク高台とは違う形態のオモク高台、すなわち高台内が滑らかに深く刈られるが、高台削りが荒くて高台タリが高い形態の高台が現われる。この様相を示す窯址のうち代表的なのが、発掘調査が行われた昇州フコク里白磁窯址である。ここから出土した白磁は、重ね焼き

のため胎土目と珪石粒目が伴に使用され、高台は変形オモク高台と、高台の高いオモク高台によって代表される。このような高台形態は、典型的なオモク高台とは製作時期の違いがあると思われる。

2-3　長興郡

長興郡では、青磁窯址 1 基、粉青沙器窯址 2 基、白磁窯址 26 基など全部で 29 基が調査された。

2-3-1　青磁窯址

青磁窯址からは、内底に丸い削り込（鏡）がない中国式蛇の目高台碗が出土する。

胎土の質は、濃い灰青色に細かい砂の微粒子と気泡があり、この上に透明な緑青色や緑褐色の釉薬が加えられた。釉薬は、このほかに青味がかった灰色の濁ったものがあり、これとは別に、胎土がきれいで釉色がオリーブグリーン色を帯びることもある。しかし全般的に釉薬の熔融状態が均一ではなく、器面に斑点のように釉薬が溜ることがある。

初期青磁の標識的な高台様式である蛇の目高台は、接地面の幅が 1 cm に足りないタイプ（線蛇の目高台）と典型的な広い蛇の目高台があるが、二つのタイプはすべて内底に丸い削り込（鏡）はない。

このタイプの全南地方における代表的な窯址は、高興雲垈里青磁 1 号窯址と康津龍雲里一帯の窯址があり、中でも 9 号窯址がよく知られている。器の形態や製作方法、匣鉢の形態などは、これら窯址で出土したものとほぼ同じだが、全般的に釉胎の質が非常に落ちる。中国式蛇の目高台や線蛇の目高台碗が出土する窯址は、高麗青磁の始原様相を明らかにする重要な窯址で、長興郡調査でその例が新たに付け加えられた。このことから当時西海岸や西南海岸の多くの窯址で、青磁製作のための努力が重ねられていたことが分かる。青磁の製作時期は、初期青磁窯址で例外なしに出土する蛇の目高台碗が基準となっている。

蛇の目高台が初めて出現した中国では、これが唐代陶磁の典型的な高台形式で、だいたい 8 世紀から 9 世紀の前半に隆盛となり、五代には幅が狭い高台が一般型となった。日本の場合は、中国の影響を受けて 9 世紀後半には、すでに土器などに蛇の目高台碗の形式が反映されている。当時の韓・中・日三国のこのような関係から見て、韓国でも 9 世紀頃には蛇の目高台の青磁碗が製作されたに違いない。

2-3-2　粉青沙器

粉青沙器は、龍谷里窯址が注目される。ここは匣燔による上質な沙器を製作した窯址で、粉青沙器以外に青磁と白磁を製作した。器種は、大接、皿、平碗、祭器、俵壺、甕、盒、馬上盃など非常に多様である。

胎土は、粒子がきれいで精選されて微細な気泡があり、濃い灰青色系列で暗い。釉色は緑が漂う灰青色や灰青色である。

器面に文様が施されたものが多く、粉青沙器の場合、象嵌、印花、彫花、剥地技法が使用され、青磁には陰刻技法の文様がある。文様の種類は、象嵌技法の場合、龍文と蓮華文、蓮弁文、幾何学（線）文、草花文などのあるが、龍文は黒白象嵌である。印花技法に施文された文様は、歯車型の菊花文、菊花文、三円文、六円文、蓮弁文、蝶文、連圏文などがある。剥地技法では、牡丹文があり、彫花技法は牡丹文と雷文がある。

大接と皿などの文様は、印花沙器の全盛期の様相を見せてくれるものもあるが、歯車型の菊花文や六円文、三円文などの古い型の文様がある点から、早い時期の窯であることが分かる。また黒白象嵌の龍文様などは、高麗末の青磁の様相を見せている。以上のことから、窯は高麗末または朝鮮初期、すなわち 14 世紀末か 15 世紀初期に開かれたと推測される。

印花文のうちで特徴的なことは、大接や皿などの主文様として蓮弁文が使われた点である。この文様は、忠清道や慶尚道地方では日常的に使用される文様で、特に慶尚道地方でよく使われたが、これは慶尚道地名のある大部分の器に蓮弁文が主文様として使用されている点からも分かる。しかし全南地方では、高興雲垈里と霊巌祥月里など、海辺と接した限定された地域でのみ発見される独特の文様である。

当時の海上交易を通して、忠清道や慶尚道地方の陶磁が全南地方に影響を与え、海辺の窯址でも製作されるようになったと推測され、今後の調査研究が期待される。

2-3-3　白磁窯址

白磁は、大部分が地方の需要にそって生産されたので、その質が中央官窯で製作されたものに比べて非常に落ちる。しかし龍谷里の粉青沙器窯で一部製作された白磁の場合、匣燔である可能性が非常に高い。残りの窯址の白磁は、すべて匣鉢を使用しないで重ね焼きである。

長城郡で調査された 26 基の白磁窯址は、朝鮮時代の全期間にわたり製作活動を行ったことから、白磁の時期別変化過程を把握することができる。白磁は、高台の形態と重ね焼きのために器の間に置いた目の種類によって、次の 7 段階に分類される。

1）高台が広く浅く内傾したタリ高台で、細かい砂目が、この地域の白磁窯址で一番早い時期の物である。龍谷里粉青沙器窯址で出土した白磁がこれに該当し、匣燔である。

2）タリ高台と竹の節高台が共存し、砂目を使用して重ね焼きされている。長興郡では、1 基だけでヘチァン里窯址がある。

3）オモク高台が出土する窯址で、胎土目である。高台の接地面の幅が広くて、高台内が深く刈られている。前時期の特性がまだ残っていて、口縁部が自然に広がり、器壁が柔らかい曲線を成す。オゴク里 1、2、3 号と龍谷里窯址があり、なかには前段階のタリ高台と共

存するのもある。

4）オモク高台と、高台内を浅く削った変形オモク高台とが共存し、胎土目を使用した重ね焼きである。復興里 1、2 号、オゴク里 4 号、青龍里、龍反理、龍田里 1、2、3 号、蓮亭里 1、2、3 号窯址が該当する。なかでも、龍田里と蓮亭里窯址は、変形オモク高台が主流である。

5）高台内が浅く削られた変形オモク高台と高台表面が偏平な平底高台、そして高台の高いオモク高台が共存する。重ね焼きには、胎土目や珪石粒目が使用されるが、一窯で両方を使った場合もある。釉胎は、濃い灰色を帯びるものが多く、器壁の線が直線である。龍門里 1、2、3、4 号と鳳徳里窯址がある。これと類似の窯址で、発掘調査の行われたのは昇州フゴク里窯址である。

6）平底高台と高台の高いオモク高台が共存する。目には珪石粒が使用される。質が非常に悪く、釉胎の色は、青味がかった濃い灰色である。牛山里 1、2、3 号窯址がある。

7）タリ高台で、土砂目を使用し、重ねて焼き、器壁が厚く線が鈍い。地域で一番遅い時期の窯址で月松里 1、2 号と富平里窯址があり、近代に至るまで製作活動を継続したと言う。

以上 7 段階のうち、1 、2 の段階は、それぞれ全体の 3.7%とごく僅かだが、4 の段階は 39.2%を占め、この段階が地方白磁の活性化した時期であることを示している。しかしこの段階別の編年は、現段階では根拠となる資料が乏しく、難しい状態である。そのためには、地方白磁窯址の体系的な発掘調査と生活遺跡から出土した白磁の解析、そして編年が可能な白磁出土墓地との比較、器形と製作様相の時期別変化など、多角的な研究が行われなければならない。

３．姜敬淑の新しい編年と問題提起

1991 年刊の『全南地方陶窯址調査報告Ⅲ 高興雲垈里』と 1995 年刊の『全南地方陶窯址調査報告Ⅳ 高興・寶城・長興』は、粉青沙器の編年に関して、1986 年に姜敬淑が示した時代区分に沿った形で作業を進めている。しかし現在の姜敬淑自身は、その後『韓国陶磁史』(一志社、1989 年刊)、『韓国陶窯址研究』（シゴン社、2005 年刊）のような大きな業績を公表し、1986 年時点の『粉青沙器研究』とは異なる時代区分を考え始めている。

ここでは、2004 年 6 月に湖林美術館で行われた大規模な粉青沙器展のカタログに図録とともに添えられた論文「粉青沙器の特徴と変遷」をもとに新しい時代区分を紹介して見たい。この新しい時代区分と高興・寶城・長興における発掘調査、日本各地における朝鮮王朝陶磁の発掘調査の成果とを重ね合わせると、粉青沙器の日本への移入に関して、従来とはかなり違った

見方が可能になるように思われる。[10]

１．胎動期（1365 年～1400 年）

象嵌青磁文様の解体と変貌

梅瓶の曲線の変化

暗緑色の釉色

*康津沙器所の解体によって窯が全国に拡散する

２．発生期（1400 年～1432 年）

14 世紀高麗象嵌青磁の伝統を持った象嵌技法の蓮唐草文の継続

肌理の粗い印花文の発生と定着

1417 年以後には、官司銘が刻まれる

集団連圏文の発生

*『世宗実録』「地理志」に磁器所・陶器所の記録

３．発展期（1432 年～1469 年）

粉青沙器の七種技法がすべて製作される

剥地、彫花技法によって粉青沙器の特徴が発揮される

印花技法の絶頂

官司銘とともに地方銘が刻印される

４．変化期（1469 年～1510 年頃）

発展期の余韻のもとに、地方色が鮮明になる

刷毛目と粉引が増加し、白磁に移行

*『経国大典』工典に、司饔院組に 380 人の匠人と記載

広州官窯（分院）成立展開

５．衰退期（1510 年頃～1550 年頃）

浅い印花技法と白土刷毛目文だけを、かすかに残しながら白磁化する

以上の五つの時期区分は、粉青沙器の発生の問題を、高麗王朝か朝鮮王朝かという王朝中心の見方から切り離した上で、恭愍王や太宗などの即位や在位時期、<青磁象嵌蓮唐草文正陵銘大接> <粉青沙器(青磁)象嵌蓮唐草文恭安銘大接> <粉青沙器印花菊文恭安府銘大接>などの編年資料と、『世宗実録』「地理志」の磁器所・陶器所の記録、官窯の成立、その他の資料を参考にして行われている。

胎動期（1365 年～1400 年）の始まりを 1365 年としたのは、恭愍王妃魯国大長公主陵銘<青

磁象嵌蓮唐草文正陵銘大接>による。魯国公主は 1365 年に世を去り、その墓から発見された大接に刻まれた蓮唐草文は、1365 年前後の雰囲気を現わしている。

蓮唐草文は、1420 年が下限である<粉青沙器(青磁)象嵌蓮唐草文恭安府銘大接>まで持続している。同じく恭安府銘が入った<粉青沙器印花菊花文恭安府銘大接>には、印花技法の肌理の粗い菊文が中心文様帯に登場する。恭安府は、朝鮮王朝 2 代定宗の上王府で、1400 年から 1420 年の間に存続した官庁である。

1400 年は、恭安府銘大接の上限年代であり、同時に太宗の即位の年である。そこで、この年を胎動期の下限であると同時に発生期の始まりとした。

発生期（1400～1432 年）は 32 年間で、下限を 1432 年とした。

その理由は、『世宗実録』「地理志」の磁器所・陶器所の記載が 1424～1432 年間の調査結果によるという点を根拠にした。そこに記載された窯址からは、共通に 14 世紀的な象嵌技法の蓮唐草文が見られる一方で、疎らな印花技法の文様が中心文様帯に定着している現象が示される。

太宗在位期間（1400～1418 年）中の 1403 年には、高麗王朝時代の徳泉庫と義成庫が、内贍寺と内資寺に改称され、その銘文が太宗 17 年（1417）以後の器に見られる。

この時期に比定される銘文入りの器の文様パターンと器型は、14 世紀の高麗の伝統を濃く伝えながら、同時に粉青沙器の特徴をよく示している。

『世宗実録』「地理志」に記載された 324 箇所は、磁器所 139、陶器所 185 箇所で、上品、中品、下品の品質表示がされている。

139 の磁器所のうち、上品と評価されたのは、全国でわずか 4 ヶ所で、京畿道広州伐乙川、慶尚道尚州已未畏里、楸県里、曳俔里である。広州伐乙川は、現在の広州市中部面樊川里で、高霊曳俔里は、高霊郡星山面箕山洞である。尚州の已未畏里と楸県里は考証できず、不明である。これら 4 ヶ所は、おそらく粉青沙器ではなく白磁を焼いたために、「上品」と分類されたのではないかと推測される。

中品と評価された窯址には、公州鶴峰里、燕岐松亭里と金沙里、嶺東サブ里、泗川昆陽面松田里、扶安牛東里などがあり、下品には保寧聖淵里、青陽長谷里、晋州孝子里、谷城亀城里、忠州ヨンハ里、漆谷ハクサン里などがある。

以上のような中品窯址と下品窯址から収集された陶片には、白磁が見られず、「下品」よりは「中品」と評価された窯址の陶片の製作工程のほうが、丁寧である。

1418 年が下限とされる<敬承府銘皿>には、単独菊花文があり、1424 年が下限である<粉青沙器印花集団連圏文四耳甕>には集団連圏文があるので、1420 年代には青磁伝統の象嵌技法が残存するが、粉青沙器特有の集団連圏文が 1418～1424 年の間のいずれかの時期に発生したこ

とが分かる。

発展期（1432～1469 年）には、八道の地理調査が終わり、各地方から土産貢物の本格的な貢納を受けて国家財政が安定する。陶器と磁器も全国 324 ヶ所から貢納された。この期間は、粉青沙器のすべてのデザインが登場する最盛期で、文様が整い、各種の銘文資料が多く登場する。しかし、1469 年には京畿道広州に官営白磁工場（分院）が運営され始め、これによって地方の粉青沙器が貢物としての任務をほとんど終える。

1469 年に完成された『経国大典』工典司賚院京官職には、沙器匠 380 人の存在が確認される。1469 年まで、国家が必要とする陶磁器は、全国 324 ヶ所から土産貢物として調達されたが、これ以後は直営によって確保される体制が整備され、各地方の粉青沙器窯は消滅するか、あるいは白磁製作に切り替えられたのである。

代表的な例が、光州忠孝洞粉青沙器窯址の物原から出土した成化年間丁酉年に製作された<成化丁酉銘墓誌片>（1477）である。これは 1477 年頃の状況を知らせてくれる編年資料である。

同じ物原からは、「丁閏二」と刻まれた粉青沙器サバルと白磁サバルの高台片が発掘されている。丁閏二を丁酉年閏 2 月（1477 年閏 2 月）であると解釈すれば、二つの高台片が同じ 1477 年に製作されたことになり、1477 年には粉青沙器と白磁が同じ窯で製作されたことが推測される。

1469 年以後には、官窯の白磁生産に刺激受けて地方窯でも粉青沙器から白磁に移行していくので、1469 年が時期区分の画線になる。そして、全国 324 ヶ所の陶器・磁器窯が、50 年後の 1480 年代にはわずか 49 ヶ所しか残らないことが、『新増東国輿地勝覧』の記録から分かる。

発展期の様相をよく示す器としては<粉青沙器印花集団連圏文徳寧府銘大接>や、<粉青沙器印花集団連圏文癸巳［1473 年癸巳］銘皿片>などがある。とくに後者は、癸巳を 1473 年癸巳とすれば、1470 年代の慶尚道一帯の集団連圏文全盛を示すよい例である。

これに比べて全羅道一円では、集団連圏文の印花技法はなく、単独の花印を一つずつ施して全面を透きもなく埋めた技法が特徴である。このような例の絶頂を見せてくれるのは、光州忠孝洞で焼成されたと見られる<粉青沙器印花菊花文月山君大甕>と<粉青沙器印花菊花文徳寧銘皿>である。甕と一括で収まった胎誌の内容を見れば、月山君は 1454 年に生まれ、胎は 1462 年に埋めたと記録とあり、この甕の下限は 1462 年であることが分かる。

<粉青沙器印花菊花文徳寧銘皿>は、忠孝洞窯で使った印の特徴すなわち、高台の中の‘徳寧’は長方形の印で、皿の中心文様である単独の菊印は、典型的な忠孝洞窯で使った菊印である。この菊印は<粉青沙器印花菊花文月山君胎壺>に使用された印のようである。

変化期（1469～1510 年頃）は、中央官窯の影響下で、地方窯がそれぞれの変化を経験する

時期である。貢納義務の消えた窯は、浅くて粗雑な印花文の上に白土を刷毛目で塗ったり、文様のない大接の内外面に白土を刷毛で一度かけたりして器を作った。

その一方で、地域独特の個性を発揮する器を作り出したが、その代表的な例が公州鶴峰里窯の鉄絵粉青沙器である。

この窯址で収集された陶片の中には<粉青沙器鉄絵成化 23 年銘墓碑>、<粉青沙器鉄絵洪武 3 年銘墓碑>、<粉青沙器鉄絵嘉靖 15 年銘墓碑>などがあってそれぞれ 1487 年、1490 年、1536 年という年代を示し、鶴峰里における鉄絵粉青沙器が 15 世紀後半から 16 世紀前半に、主に生産されたことを示している。

全国の多くの粉青沙器窯のうち、特に公州鶴峰里で鉄絵粉青沙器の作られた理由はよくわからないが、中央官窯で製作される青華白磁による刺激から始まったのではないかと推測される。青華白磁に使用されるコバルトは、当時アラビア商人や中国を通じて入手される貴重品であった。しかし、1469 年の官窯成立以降は、青華白磁の製作が本軌道に乗ったものと思われる。

光州忠孝洞の丁閏二銘の粉青沙器と白磁片が、1477 年に共存したように、変化期の粉青沙器窯は、1469 年以後、官窯の影響を受けて白磁を焼くようになった。このような窯址は、全羅道では光州忠孝洞を含めて、高敞龍山里、龍渓里、忠清道では公州鶴峰里とポウンのチョガム里、慶尚道では漆谷多富里、鎭海二洞里などがある。

衰退期（1510 年頃～1550 年頃）の上限を 1510 年頃としたのは、特別の陶磁史的意味はないが、光州忠孝洞粉青沙器堆積層発掘の一番上層の年代を 1510 年頃と比定したことを根拠とする。

1510 年代には、京畿道広州官窯の白磁生産本格化から 40 余年が経過し、白磁生産は地方にも浸透していく。広州と同じ京畿道でも、軍浦山本白磁窯が活動を始めている。この時期には、全盛期の粉青沙器の面目は衰え、浅く印花された文の上に淡い白土刷毛目文があるだけの器と灰色の無文器が製作される。そしてその一方で、軟質と硬質白磁が製作さる。

４．まとめ

７頁に示した地図に見るように、高興、長興、寶城はいずれも海に面した全羅南道の小さな村である。この地方の地表調査を通して、韓国陶磁史の何が見えて来ただろうか。

まず、青磁から粉青沙器への移行過程の面白さである。

９世紀に、中国から韓国に青磁の技術が伝えられると、隣接する康津とともに高興、長興では、10 世紀には中国陶磁そっくりの蛇の目高台をもった最初期の高麗青磁を生産しはじめる。しかし、その生産は、すぐに康津と扶安という２大センターに集中し、高興、長興の青磁作製

は、技術水準の高い中央官衙への納入品ではなく、それ以外の需要にこたえる従属的なものとなる。しかし、いずれの地域でも、少数ではあるが匣鉢に納められた高級青磁が焼かれていることは、見過ごすことはできない。

また、青磁生産と平行して、ごく初期から黒釉陶磁が生産されていたことも、大切な発見であった。

高麗王朝が衰えて、朝鮮王朝の時代になると、康津と扶安の青磁窯は力を失い、粉青沙器が登場し、高興、長興、寶城の窯の生産が活発化する。粉青沙器の生産は、姜敬淑の丹念な調査に見られるように、初期朝鮮王朝の国家事業的な性格をおびたものであるらしく、技術水準の高い窯址が、全国津々浦々に見られる。

この動きは、15 世紀前半の世宗時代にピークに達し、技術的にも洗練されるが、次第に白磁への志向が高まり、1469 年あたりから京議道広州に司餐院の分院という官営白磁製作センターが活動を始めると、粉青沙器は急速に力を失う。

各地の粉青沙器窯は、粉青沙器と平行して白磁を生産し、なかには長興郡長東面龍谷里窯址のように青磁と粉青沙器と白磁が、同一窯で平行して生産される場合もあった。

高興、長興、寶城で、盛んに粉引が生産されるのは、おそらくこの時期であったにちがいない。現在、日本に伝えられるいわゆる「伝世」の粉引は、長年にわたる人間との付き合いの中で飴色に変色し、生活の跡をとどめているが、窯址発掘調査によって出土する粉引は、純白で、青みを帯び、白磁のうちでもこの時代に多く生産された「軟質白磁」とは、割って断面を見ないと判別できないほどに酷似している。

こうした粉引の生産は、姜敬淑の指摘する通り、16 世紀初頭には衰退するものと思われるので、わずか 50 年ほどにすぎない。

この時代を過ぎると、高興、長興、寶城の陶磁器生産は、白磁に移行し、中心は高興から長興に移る。長興には、高麗王朝から近代にいたるまでの、青磁、粉青沙器、白磁の窯址が点在し、あたかも韓国陶磁の歴史博物館のような状況が見られるが、白磁に関しては精品は少ない。しかし、中央の官衙に納められる陶磁以外にも地方に流通する製品が、これほどの規模で生産され続けたことは、韓国の社会史、経済史、流通史、を考える上でも、大きな発見であったと思われる

日本における現在の粉青沙器＝三島研究は、粉引を高興雲垈里の製品と断定しているが、これは必ずしも正しくない。たとえば、茶碗研究の第一人者である赤沼多佳は「高麗茶碗」のなかで、次のように述べている。(11)

粉引は「同じ粉青沙器のなかでも刷毛目や無地刷毛目とは作行きがかなり異なる。茶碗に限らず、この種の胎土は細かい黒土で、全体に薄く轆轤挽きされ、白泥は無地刷毛目に比べて薄

い。また釉に透明感があるために一層白化粧が際立っている。かつてこういう作行きのものは寶城粉引と呼ばれ、全羅南道の寶城で焼かれたといわれていたが、実際には寶城から南下した雲垈里で焼かれたことが確認されている。」

この見解の根拠は1990年代以来の高興雲垈里調査によるものだが、すでに1995年の調査報告には、雲垈里と同様の形態の粉引が寶城の窯址でも見受けられることが示されている。このことは、2005年、2006年の丁哲秀、宋基珍、樋口淳の調査によっても確認された。とくに寶城郡得糧面道村里の粉青沙器3号、4号窯址の規模は、1995年の調査報告の規模をはるかに超えるものであると考えられる。

現在の3号窯址付近は、写真1に見るとおりである。貯水池の建設によって破壊され、残された窯址は、写真左端に見える橋の奥の傾斜面に一つ残るだけだが、貯水池の水辺に沿い、50メートル程のベルト状に数多くの陶片が分布している。その陶片の質の高さと量の多さは、さらに精密な調査の必要を示している。

2006年の丁哲秀、宋基珍、樋口淳の調査は、現状を保存することに細心の注意を払い、地表を掘り起こすことはしなかったが、高麗青磁と思われる陶片（写真2)、上質の白磁と思われる陶片（写真5)、粉引粉青陶片およびトチン、窯の壁土（写真4)、印花粉青陶片（写真3）などを確認した。地表調査の場合は、発見された陶片と窯址との関係の特定が難しいが、悪意をもった第三者が故意に青磁、粉青沙器、白磁を窯址付近に運び込んだとは考えにくい。3号窯では、かなりの長期にわたって、青磁から白磁にいたるさまざまの種類の陶磁器が、複数の窯で、焼成された可能性がある。

写真1

写真２

写真３

写真４

写真５

3 号窯から下った 4 号窯址は、現在は茶畑となり、やはり破壊されているが、その規模の大きさは容易に推測される。この窯址にも、多くの質の高い粉引を中心に、さまざまのタイプの粉青沙器が分布している。

青磁から粉青沙器への流れを歴史的に辿ると、まず高興と長興に青磁のセンターがあり、その連続の上に粉青沙器の発展が築かれたことは、間違いない。しかし 15 世紀中葉から 16 世紀にかけて軟質白磁と平行して粉引の焼成が最盛期を迎えた時に、寶城郡道村里が高興郡雲堡里と並んでその有力なセンターとなっていたことも確かであると思われる。

1995 年の調査報告が、この地の粉引に関して「地理的に接した高興から沙器匠がこちらに移籍して製作したか、それとも技術が移転したか、そのいずれかである」と指摘している通りであろう。高興・長興・寶城は、いずれも海辺に面し、現在では自動車で走れば 1 時間の距離である。しかし、往時も船を使えばやはり 1 時間に満たない距離だった。

宋基珍が「海のトライアングル」と呼ぶように、高興・長興・寶城は、海路で三角形に結ば

れている。海の道を辿れば、技術も材料も製品も、簡単に行き来できたはずである。

寶城の道村里は、７頁の地図でみるかぎり、ずいぶんと山の中だが、かつては河川によって海とつながっていた。

現在の寶城は、韓国有数の茶の産地だが、この産業には日本の植民地時代に急成長をとげた歴史がある。韓国の粉引が、日本の古美術の世界で「寶城粉引」と呼ばれ始めたのは、当時寶城に移り住んだ日本の茶栽培者たちが、土地を切り開く過程で幾つも粉引の陶片を採取したことに端を発するのかもしれない。しかしこの推測はともかくとして、寶城にすぐれた粉引の窯址が存在することは、事実である。

中国からの青磁の技術が、海路を経て全羅南道の康津と全羅北道の扶安に伝えられ、大きく開花し、さらに海路によって結ばれた高興・長興・寶城という内海の３地点の間で、青磁・粉青沙器・白磁の技術が交換され、生産と流通が独自の発展を遂げたとしたら、これもまた興味深いことである。

追記　本稿の執筆は樋口淳が担当したが、調査と資料作成は丁哲秀、宋基珍、樋口淳３名の共同作業である。また本稿の執筆にあたり、『粉青沙器研究』の著者である姜敬淑先生から多くの御教示をいただいた。研究ノートの公表にあたり、深く感謝したい。

注

1)　雑誌「白樺第十三年九月號」白樺社、1922 年刊、p9 参照。
2)　雑誌「白樺第十三年九月號」白樺社、1922 年刊、p11 参照。
3)　高崎宗司編『浅川巧全集』、草風館、1996 年刊、p560-61 参照。
4)　『植民地主義と歴史学』（刀水書房、2004 年刊）所収の李成市の論文「コロニアリズムと近代歴史学」参照。
5)　尹龍二のこの論文は、後に加筆され、片山まびによって翻訳紹介された『韓国陶瓷史の研究』（淡交社、1998 年刊）に収められている。
6)　姜敬淑著『粉青沙器研究』、一志社、1986 年刊、p375 参照。
7)　国立光州博物館学術叢書第 22 巻『全南地方陶窯址調査報告Ⅲ 高興雲垈里』（国立光州博物館、1991 年刊）および国立光州博物館学術叢書第 28 巻『全南地方陶窯址調査報告Ⅳ 高興・寶城・長興』（国立光州博物館、1995 年刊）を参照。以上 2 冊の報告書は、窯址ごとの地理的な説明と詳しい発掘陶片についての記述と写真および地図からなっている。２つの報告は、同じ形式を採用しながら異なる観点から記述を行うことが多い。本稿では、このすべてを紹介することは不可能なので、できるかぎり整合的に陶片の特徴を要約するよう努めた。また、高興調査については、1995 年調査を「第二次調査」として窯址名を記した。
8)　高台の形態は、編年の基準とされるが、韓国と日本では形態が異なり、呼称が異なることが多い。オモク高台というのは、高台内を凹レンズのように滑かに丸く削りこんだ高台のことである。タリ高台のタリというのは足の意味で、高台がしっかりと立ち上がった姿を言う。竹の節高台の形態と呼称は、日本の場合と共通する。

9)　以下に『全南地方陶窯址調査報告Ⅲ 高興雲垈里』と『全南地方陶窯址調査報告Ⅳ 高興・寶城・長興』の結論部分を要約した。既に述べたように、二つの報告書の記述スタイルが違うが、できるかぎり整合的に要約するよう努めた。

10）図録『湖林博物館所蔵・粉青沙器名品展』、湖林博物館、2004 年刊、p279-294 参照。
本稿では、特に第 3 章の「粉青沙器の編年」（p281-286）を要約的に紹介した。

11）雑誌「日本の美術」第 425 号、至文堂、2001 年刊、p36 参照。

社会科学研究所　定例研究会　報告要旨

テーマ：「大国の復興－中国高度成長のゆくえ」

講　師：今井健一（アジア経済研究所研究員）

日　時：2006 年 10 月 10 日（火）

場　所：生田社研会議室

中国と日本は地理的な距離がきわめて近く、貿易を通じたきずなも深まりつつある。中国は経済規模、個別の産業規模で日本に急速にキャッチアップしてきている。従来日本が大きな経済的プレゼンスを持っていた東アジア・東南アジアでも、中国のプレゼンスは顕著に増大してきた。こうした状況から、日本にとって中国経済の今後に対する明確なビジョンを持つことは不可欠である。

中国は歴史上長期にわたって世界最大の帝国としての地位を誇ってきた。清末以降毛沢東期に至るまでの混乱は一時的な disturbance であり、目下の成長は中国が大国としての優位性を再び発揮し、世界の経済大国に復帰する歴史的なプロセスの一貫ととらえるべきだろう。

目下の中国の経済成長は、インフラ需要・自動車需要に支えられた投資主導型の成長である。そこにバブル的要因が介在するのは事実であるが、根底には中国の急速な都市化・産業高度化という実需要因があることを見逃すべきではない。また、勤勉な労働力、人々の向上心、活発な起業活動は、成長を推進する基礎的な条件である。中国のダイナミックな産業発展は、近年の携帯電話端末産業の成長に観察される。地場メーカーはマーケティングに偏った戦略により後退を余儀なくされているが、そのなかから端末設計会社、IC 設計会社など新しいビジネスが育ちつつある。中国固有の柔軟な人的ネットワークは、日本のタテ型人的ネットワークと比較して、IT 産業の発展に適しているという側面がある。

中国が市場経済としての未熟さ（一例として知的所有権や金融システムの未整備）、所得格差の拡大などの問題を抱えていることは事実である。さらに重要な問題として中国は、一党独裁から民主的な政治決定への移行という困難な課題を抱えている。だが日本としては中国の持つ発展のダイナミズムに着目して、経済大国中国との共生の途を探るべきである。

テーマ：「中国の経済成長とエネルギー需給－世界市場への影響」

講　師：堀井伸浩（アジア経済研究所研究員）

日　時：2006 年 10 月 10 日（火）

場　所：生田社研会議室

昨今、中国の原油輸入量が急増していることが世界の関心の的となっている。かつて 80 年代には中国は原油の大輸出国であり、日本にとっても「大慶油田」は中東以外の貴重な輸入ソースとして重要な位置づけであった。依然中国は世界第 6 位の産油国ではあるものの、近年原油輸入量は大幅に増え、原油の輸入依存度は 2005 年には 41.3%にまで達している。報告では、注目を集める石油に加え、主要エネルギーである石炭、天然ガスの需給について現状と今後の展望を行った。

まず導入部として、中国のエネルギー統計の問題について触れた。中国では 1997 年から 2000 年にかけて経済成長率は引き続き高水準であったにもかかわらず、エネルギー消費量は前年比マイナスとなった。この点につき、日本の 80 年代以降との比較で経済成長とエネルギー消費のディカップリングが生じるのは産業構造の変革が必要であること、日本の省エネルギーを牽引してきたのは産業部門であることを指摘し、中国では引き続き産業部門のエネルギー消費量が増加し続けていることなどから、統計の誤差による可能性が高いという見方を示した。

石油の需給については、国内生産が資源的な制約から停滞している一方、モータリゼーションに伴うガソリン需要の増加などにより、需給ギャップが拡大している現状である。国内の増産はあまり期待できず、そのため中国の石油企業は海外の原油権益を確保するために、世界各地で開発プロジェクトを展開している。2004 年時点で権益原油が輸入量に占める比率は 15%に達し、目覚ましい成果であると言える。

石炭の需給については、近年非常に逼迫したものの、2002 年以降になると炭鉱への投資ブームが生じたことで、今後は逆に供給過剰に転じる可能性が高い。投資額について言えば、2000 年には 188 億元にまで低下したが、2004 年には 702 億元とまさに急増したためである。なお、中国の石炭輸出は 2000 年から 2003 年にかけて急増し、世界第 2 位の輸出国となった。かつ東アジア諸国向けがその大半を占めるため、世界最大の石炭輸入国である日本を始め、韓国、台湾などにとっては非常に重要な輸入ソースである。2004 年以降、中国の石炭輸出が減少傾向となっていることは少なからぬ影響を及ぼしてきたが、今後は中国の石炭輸出が回復する可能性も少なくないと思われる。

最後に天然ガスの需給については、中国では大気汚染の主要因となっている石炭に替わるクリーンエネルギーとして天然ガスは大いに期待されており、一次エネルギーに占める比率は今後現状の３％未満という水準から 2010 年前後には７％を超える水準にまで普及を進めていく計画である。その一環として、新疆から上海に至る「西気東輸」（「西のガスを東に輸送する」）パイプラインや LNG（液化天然ガス）受入ターミナルの建設など大規模インフラの整備を進めている。しかし天然ガスは輸送用の石油と事なり、石炭と直接競合するため、３倍以上に及ぶ価格差を考えると自ずと普及には制約があると思われる。国内の生産余力も石油と比較すると十分にある。したがって天然ガスの輸入量は今後もそれほど大きく伸びるとは考えられない。しかし近年アメリカなどを始め、かつて LNG を全く輸入していなかった国々が輸入し始めた状況の下、世界の LNG 輸入量の半分近くを占める日本にとっては中国も新たに輸入国として参入することで若干の影響はあると言える。

最後に結論として以下の点を述べた。まず石油を除けば、当面は中国のエネルギー需給は安定へと向かい、世界市場への影響はそれほど巨大なものではないこと、石油については資源的な制約から国内の増産に限界がある以上、輸入は増えていかざるを得ないが、中国政府及び石油企業は海外からの開発輸入を積極的に進める対策を採っており、中国の石油企業が自らのリスクと資金を投じて、彼らが開発しなければ世界市場に出てこない原油をマーケットに供給することで世界市場へ与えるインパクトを軽減する効果を持つこととなると考えられる。

〈編集後記〉

月報 10 月号をお届けします。

今号は、丁　哲秀、宋　基珍、樋口　淳の三氏による「粉青沙器」研究の成果です。研究史を総括するとともに最新の調査の知見も盛り込まれた論稿です。研究史からは朝鮮半島と日本の複雑な歴史の長い影が仄見えると同時に、文化や歴史にたいする先人の真摯な追究の姿勢がうかがわれ、素人ながら感銘を受けました。また、詳細な資料の記述をとおして、粉青沙器の制作や流通の様子が生き生きと浮かび上がってくるようで、絵巻でも見ているような楽しさを感じました。さらに、時代区分が研究の発展とともに洗練されていく過程も興味深いものです。時代区分の難しさは多くの研究に共通の問題ではないでしょうか。それはとりわけ歴史学にとっては永遠の課題であると思われますが、社会科学の他の分野でも、時間や時代という問題に対する関心は近年とくに高まっているように思います。そうした理論的な観点からも本稿は示唆に富むものとなっています。　(M. A.)

神奈川県川崎市多摩区東三田２丁目１番１号　電話　(044)911-1089

専 修 大 学 社 会 科 学 研 究 所

（発行者）　柴　田　弘　捷

製　作　　佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前 2-10-2　電話　(03)3404-2561